

稲荷塚古墳群

(第 1 地点第 4 次)

公共下水道工事（桜川処理分区枝線 4-1 工区）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2019

水戸市教育委員会

いな り つ か こ ふ ん ぐ ん
稲荷塚古墳群

(第1地点第4次)

公共下水道工事（桜川処理分区枝線4-1工区）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

水戸市教育委員会

ごあいさつ

水戸市は那珂川の流域に位置し、八溝山系の山並みと那珂川・千波湖の豊かな自然に囲まれています。私たちの祖先もこの豊かな環境のもと古くから生活を営んできました。

稲荷塚古墳群は、鶏足山塊から南西へと延びる台地上に立地する3基の円墳から構成される古墳群で、同古墳群の周辺には、弥生時代から古墳時代への移行期を示す土師器の壺形土器や「郷長」銘の墨書土器が出土した「大塚新地遺跡」、21基を数える奈良・平安時代の火葬墓群が検出された「向原遺跡」、古墳時代から奈良・平安時代にかけて営まれた集落遺跡である「南中坪遺跡」等、数多くの古代遺跡が展開しています。

埋蔵文化財はその性質上、一度破壊されてしまうと二度と現状に復すことができないため、私たちが大切に保管しながら後世へと着実に伝えていかなければならない貴重な歴史的文化遺産です。

平成20年以降、稲荷塚古墳群の周辺には宅地造成工事が展開し、古墳群の周辺景観も住宅地街へと大きく様変わりしております。こうした開発とその地下に眠る埋蔵文化財の保護の両立は、行政としても大きな課題として懸念されるところでありますが、本市においては、埋蔵文化財の歴史的意義や重要性を踏まえ、文化財保護法並びに関係法令に基づき、保護・保存に努めているところです。

このたび計画された稲荷塚古墳群内における公共下水道工事につきましては、文化財保護の観点から遺跡への影響を考慮し、開発部局と十分な協議を重ねてまいりましたが、遺跡の現状保存は困難であるとの結論に至り、次善の策として記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査の結果、稲荷塚古墳群を構成する3基の円墳の周囲に巡る周溝が検出されるとともに、古墳に樹立されていた埴輪や周溝が埋没していく過程で流れ込んだ土器等が出土し、古墳の築造時期や周溝の埋没時期が判明するなど貴重な成果を得ることができました。

ここに刊行する本書をかけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究などの資料として、広くご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、今回の調査の実施に際し、多大なる御理解と御協力を賜りました地域住民の皆様と関係各位に心から御礼と感謝を申し上げます。

令和元年 12月

水戸市教育委員会教育長職務代理者 教育委員 東小川 昌夫

例 言

1. 本書は茨城県水戸市大塚町 1759～1753 番地に所在する稲荷塚古墳群の発掘調査報告書である。
2. 調査は公共下水道工事（桜川処理分区枝線 4-1 工区）に伴い実施された。
3. 調査の対象面積及び期間は以下の通りである。

調査面積 153.0㎡
調査期間 令和元年 7 月 1 日～令和元年 8 月 31 日
整理期間 令和元年 9 月 1 日～令和元年 12 月 20 日
4. 調査は水戸市教育委員会の指導のもと、関東文化財振興会株式会社が実施した。調査の体制は以下の通りである。

調査主体 本多 清峰（水戸市教育委員会教育長（令和元年 10 月 4 日まで））
東小川昌夫（水戸市教育委員会教育長職務代理者（令和元年 10 月 5 日から））
増子 孝伸（水戸市教育委員会事務局教育部長）
白石 嘉亮（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課長）
川口 武彦（同埋蔵文化財センター所長）
米川 暢敬（同主幹）
新垣 清貴（同主幹）
廣松 滉一（同文化財主事）
太田 勇陽（同文化財主事）
丸山優香里（同嘱託員）
松浦 史明（同嘱託員）
外山 綾乃（同嘱託員）
昆 志穂（同嘱託員）
有田 洋子（同嘱託員）

調査担当者 成島 一也・西川 忠春・源田 正枝（関東文化財振興会株式会社）
現場作業 清水 昊 坂場 光雄 谷川 明正 飛田けい子 三浦 睦子 白土 和夫
佐久間弘美 阿部 武男 高野 正行 岡崎 稔 安井 忠一 芥川 彰
川又恵美子 郡司ゆき子 遠藤 香織
5. 整理作業は関東文化財振興会株式会社において実施した。参加者は以下の通りである。

遺物基礎整理作業・拓本採択 益子 光江 郡司ゆき子 川又恵美子 遠藤 香織
遺物実測作業 大越 慶子 平井百合子
デジタル編集 清水 尚子 田口 睦子
6. 本書に用いた遺構写真撮影・遺物写真撮影は、成島・西川が行った。
7. 執筆分担
第 1 章 第 1 節 新垣 清貴（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課 埋蔵文化財センター主幹）
第 1 章 第 2 節～第 4 章 成島 一也・西川 忠春（関東文化財振興会株式会社）
8. 本報告書に係る出土品、および記録図面・写真は一括して水戸市教育委員会が保管している。

9. 本報告書の作成にあたり、古墳及び出土した埴輪の様相については、井博幸氏（元国土舘大学教授）に御指導・御助言を賜った。ここに記して謝意を表す。

凡 例

1. 本書に記してある座標値は、世界測地系IV系を用いており、方位は座標北を示す。また、標高は海拔高である。

2. 遺物の注記に用いた略号は以下の通りである。

稲荷塚古墳群…201-221

古墳…TM 土坑…SK テストピット…TP

3. 本報告書に用いた遺構及び遺物の実測図・遺構一覧表・遺物観察表等で使用した記号と表示は、次のとおりである。

(1) 記号と表示 遺構 TM：古墳 SK：土坑 TP：テストピット K：攪乱
遺物 ● = 土器・土製品

トーン  = 赤彩  = 黒色処理  = 須恵器

(2) 計測値の単位は、m・cm, kg・gである。なお、現存値は（ ）で、推定値は [] を付して示した。

(3) 備考の欄は、残存率や写真図版番号、その他必要と思われる事項を記した。

(4) 遺物番号については、土器、拓本のみ記載の土器片、土製品、石器・石製品ごとに通し番号とし、本文・挿図・写真図版に記した番号も同一である。

4. 本報告書に掲載した遺構・遺物実測図などの作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 200 分の 1、遺構実測図は土坑・テストピットは 1/60、古墳は 120 分の 1 に縮尺して掲載することを基本とした。

(2) 遺物実測図は原則として 3 分の 1 で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

5. 堆積土層および出土遺物の色調については、『新版標準土色帖』2008 年版（農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いた。

6. 周辺遺跡地図（第 1 図）は水戸市教育委員会発行『水戸市埋蔵文化財包蔵地分布地図（平成 24 年度版）』を用い、縮尺を 1/25,000 に変更している。

目次

目次

ごあいさつ

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
(1) 発掘調査	
(2) 整理作業	
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本土層	9
第3節 検出された遺構と遺物	11
(1) 縄文時代	11
(2) 弥生時代	11
(3) 古墳・奈良時代	12
(4) 中世以降	25
第4章 まとめ	28
第1節 古墳の様相（築造年代順）	28
第2節 周辺地域との繋がり	29

写真図版
抄録

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図	3	第8図 第1号墳出土遺物実測図	15
第2図 遺跡位置図	6	第9図 第2号墳遺構図	17・18
第3図 遺跡全体図・調査区設定図	7・8	第10図 第2号墳出土遺物実測図	20
第4図 基本土層図	10	第11図 第3号墳出土遺物実測図	22
第5図 縄文時代出土遺物実測図	11	第12図 第3号墳遺構図	23・24
第6図 弥生時代出土遺物実測図	11	第13図 土坑実測図	26
第7図 第1号墳遺構図	13・14		

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧	5・6	第5表	第2号墳出土遺物観察表	19・21
第2表	縄文時代出土遺物観察表	11	第6表	第3号墳出土遺物観察表	22
第3表	弥生時代出土遺物観察表	12	第7表	出土遺物集計表	31
第4表	第1号墳出土遺物観察表	16			

写 真 目 次

図版1	稲荷塚古墳群第1号墳（南側上空から）、稲荷塚古墳群第2号墳（南側上空から）、稲荷塚古墳群第3号墳（東側上空から）
図版2	第1号墳全景（南から）、第1号墳周溝完掘状況（北から）
図版3	第1号墳周溝土層断面A（南から）、第1号墳周溝土層断面B（南から）、第1号墳周溝土層断面C（南から）、第1号墳周溝遺物出土状況（東から）、第1号墳周溝遺物出土状況（南から）、第1号墳周溝遺物出土状況（南から）、第1号墳周溝完掘状況（南から）
図版4	2号墳全景（南から）、第2号墳周溝完掘状況（北から）
図版5	第2号墳周溝遺物出土状況（南から）、第2号墳周溝遺物出土状況（南から）、第2号墳周溝遺物出土状況（北から）、第2号墳周溝遺物出土状況（南から）、第2号墳周溝遺物出土状況（北から）、第2号墳周溝遺物出土状況（南から）
図版6	第3号墳全景（南から）、第3号墳周溝完掘状況（東から）
図版7	第3号墳周溝土層断面A-1（西から）、第3号墳周溝土層断面A-2（西から）、第3号墳周溝土層断面A-3（西から）、第3号墳周溝土層断面A-4（西から）、第3号墳周溝土層断面A-5（西から）、第3号墳周溝土層断面A-6（西から）、第3号墳周溝土層断面B（南から）、第3号墳周溝遺物出土状況（南から）
図版8	第3号墳周溝遺物出土状況（南から）、第3号墳周溝遺物出土状況（南から）、第3号墳周溝遺物出土状況（南から）、第3号墳周溝完掘状況（北から）、第3号墳周溝完掘状況（南から）
図版9	基本層序(テストピット1)(西から)、基本層序(テストピット2)(西から)、第1・2・6号土坑完掘状況（南西から）、第1・2・3号土坑土層断面（南から）、第1号土坑土層断面（南西から）、第6号土坑土層断面（南西から）、第4号土坑完掘状況（南から）、第4号土坑土層断面（北東から）
図版10	縄文・弥生時代、第1号墳出土遺物
図版11	第1～3号墳出土遺物①
図版12	第1～3号墳出土遺物②
図版13	第2号墳出土遺物①
図版14	第2号墳出土遺物②
図版15	第2・3号墳出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成30年2月27日付けで水戸市長 高橋 靖（下水道整備課扱）より下水道管理設工事に伴う埋蔵文化財発掘の通知が提出された（平成30年2月27日付け下整第698号）。開発対象地には、円墳が3基隣接し、平成20年度の試掘調査の際に開発対象地である認定外道路の直下において古墳の周溝の一部が確認されており、周溝への影響は避けられないと判断されるため、記録保存を目的とした本発掘調査の実施が相当である旨、意見書を付して茨城県教育委員会教育長あて、進達した。

この意見書を受けて、茨城県教育委員会教育長から平成31年1月29日付け文第3694号にて、工事によって遺構等が損壊されるなど埋蔵文化財に影響があるので、工事着手前に発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構等が発見された場合には、その保存等について別途協議を要する旨、指示・勧告があった。

これを受けて、市埋蔵文化財センターは、総計153㎡（総延長170m×幅0.9m）を調査範囲とすることを決定し、関東文化財振興会株式会社の支援を受けて本発掘調査を実施することとなった。平成31年4月30日付けで関東文化財振興会株式会社より文化財保護法第92条に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出が提出されたことから、茨城県教育委員会教育長へ進達し、令和元年6月上旬から発掘調査に着手する予定であったが、発掘調査区の復旧方法について、下水道整備課と道路管理課の間で認識に齟齬があり、協議に時間を要したため、発掘調査に着手したのは令和元年7月1日からとなった。

第2節 調査の方法と経過

（1）発掘調査

稲荷塚古墳群の発掘調査は、令和元年7月1日～令和元年8月31日で実施した。発掘調査に当たっては、以下の方法で行った。

- ①幅が狭く、細長い調査区になるため、まず国土地理院3級基準点をもとに光波測量器により測量した調査基準点（既知点）を何点か設け、調査区・遺構等の記録作業に用いた。
- ②掘削は重機による舗装面（地表面）から表土層までの除去を行い、その下の遺構確認面までと遺構の掘り込みは人力により行った。
- ③遺構の実測は、光波測量器と手実測を併用した。
- ④写真記録は、35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサル、デジタルカメラ（APS-C、1620万画素）を使用して記録した。また、空撮にはドローン（1990万画素）を使用した。

また、調査の経過については、7月1日から事前準備（駐車場設置等）を行い、8日から11日まで表土除去と遺構確認作業を行った結果、古墳の周溝が3条、土坑5基が確認された。調査区全体にわたり地表面約25cmから約1mまで宅地整備のための攪乱を受けている。16日から南側（TM1側）の掘り込みに入り、26日に実測作業と写真撮影を終了した。埋め戻しは、水戸市埋蔵文化財センターと協議・了承の上に24日から随時行い、30日に終了した。また、31日から8月30日まで現場撤収作業（舗装工事、駐車場撤去等）と調査終了関係事務を行った。

(2) 整理作業

稲荷塚古墳群の整理作業は、令和元年9月1日～令和元年12月20日で実施した。整理作業の経過としては、遺物洗浄・注記・接合を9月2日から13日まで、これと並行して遺物実測を4日から20日まで、遺構図面の修正を9月2日から27日まで、原稿執筆を9月3日から10月28日まで、遺物写真撮影を9月30日から10月4日まで、版下作成とトレースを10月7日から11月8日まで、レイアウトなど図版編集を11月7日から11月21日まで、校正を11月25日から12月20日まで行った。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

稲荷塚古墳群は、北緯36°23分27秒、東経140°23分26秒、(世界測地系)の茨城県水戸市大塚町1759～1753番地に所在している。

稲荷塚古墳群が所在している水戸市大塚町は、那珂川と桜川とに挟まれた「上市台地」と呼ばれる洪積台地の西部、桜川の支流東側の標高44mの台地上に位置し、古墳群の西側に桜川支流と低地を望み、東側には上市台地が広がっている。

上市台地は、那珂川によって形成された河岸段丘の一つで、古生代の鶏足層を基盤とし、その上に泥岩からなる水戸層、粘土や砂で構成された見和層、段丘礫からなる上市層、灰白色の常総粘土層、そして関東ローム層が順に堆積している。

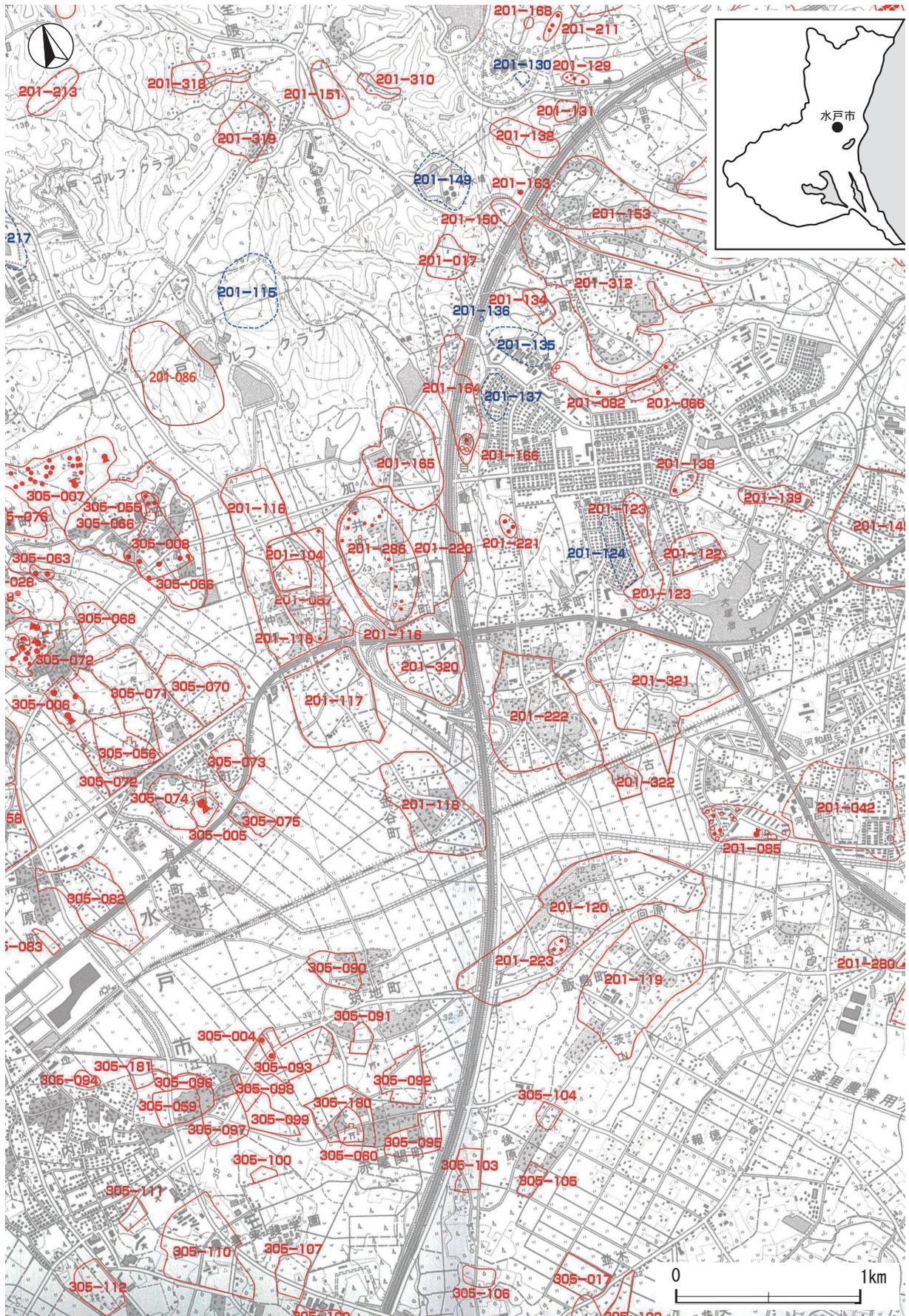
当古墳群の位置は、この上市台地の西南の縁辺部にあたり、その西側には桜川の支流で解析された低地が入り込む急崖な境界となっており、低地との比高は約20mである。

第2節 歴史的環境

稲荷塚古墳群は、水戸市の西部に位置し、標高44mの上市台地上の南北130m、東西40mに渡って広がっている遺跡である。この上市台地と桜川周辺の台地上では、旧石器時代～近世に至る多くの遺跡が確認されている。実際に調査された遺跡は多くはないが、長い年月にわたって人々の生活が営まれていたことがわかる。ここでは、市内の同時代の遺跡と周辺遺跡(半径約3kmに隣接する遺跡)について概観を述べる。

(1) 縄文時代

市内には、早期～晩期の遺跡が多数存在する。常陸国風土記に紹介されている大串貝塚は縄文前期の貝塚である。市内の調査事例としては、アラヤ遺跡(早期後葉～晩期中葉)、渡里町遺跡(早期～中期後葉)、台渡里官衙遺跡群(後期前葉～中葉)、砂川遺跡(中期後葉)、白石遺跡(中期後葉)などが、那珂川・桜川流域に立地している。周辺地域では、29遺跡が当遺跡の北東側に多く立地しており、清水遺跡<201-123>、向井原遺跡<201-137, S48 調査>、松原遺跡<201-220, S55 調査>、全隅権現台遺跡<201-149>などが知られている。



第 1 図 周辺遺跡分布図

(2) 弥生時代

堀遺跡や松原遺跡など調査された遺跡はあるが、大半が踏査により確認されている遺跡である。これら上市台地上で確認されている遺跡の多くから、弥生後期の十王台式土器が出土している。周辺地域では25遺跡が確認され、松原遺跡、毛勝谷原遺跡〈201-164〉、向井原遺跡、大塚新地遺跡〈201-222, S54 調査〉、清水遺跡、仲坪遺跡〈201-116〉、南仲坪遺跡〈201-117, H11・14 調査〉などが知られ、向井原遺跡と大塚新地遺跡以外は弥生時代後期の遺跡である。向井原遺跡、大塚新地遺跡は共に中期から後期の遺跡で、向井原遺跡では中期から後期の住居跡が8軒検出している。大塚新地遺跡では中期から後期の住居跡が10軒検出している。

また、南仲坪遺跡からは後期の竪穴建物跡が2軒検出され、いずれも後期十王台式・東中根2式の土器が出土している。

(3) 古墳時代

市内で線刻をもつ横穴式石室の吉田古墳を中心とする吉田古墳群、那珂川流域の愛宕山古墳群など上市台地周辺の河川流域に多くの遺跡が形成された。当遺跡が立地する桜川とその支流も例外ではなく、隣接地域には集落跡と古墳群合わせて67遺跡が確認されている。その内訳は、集落跡46遺跡、古墳群20遺跡、生産跡1遺跡である。

特に、古墳群はこの時代に隆盛を極めており、当遺跡と同じ丘陵に位置する毛勝谷原古墳群〈201-166〉・下荒句古墳群〈201-082〉・北原古墳群〈201-138〉、桜川支流を挟んで西側の丘陵に位置する立地する松山古墳群〈201-286〉・妙徳寺付近古墳群〈201-087〉・加倉井古墳群〈201-086〉、桜川を挟んで南側に立地する赤塚古墳群〈201-085〉、飯島古墳群〈201-223〉、内原地区の田島支丘に立地する三本松古墳群〈201-008〉・田島古墳群〈305-007〉、内原地区の牛伏支丘に立地する舟塚古墳群〈305-006〉、牛伏古墳群〈305-009, 一部調査〉などが知られている。

また、それぞれの古墳群周辺には、松原遺跡、毛勝谷原遺跡、加倉井原遺跡〈201-165〉、寺山遺跡〈201-135〉、下荒句遺跡〈201-066〉、南仲坪遺跡、仲坪遺跡〈201-116〉などの集落跡が確認されている。生産遺跡としては、北東の田野川支流に立地する山田窯跡群〈201-168, H9 調査〉が古墳時代後期から奈良時代まで操業していた。

ここで注目されるのは、中期から後期にかけて標高約50～80mの高い丘陵地に多くの円墳や巨大な前方後円墳を築造する傾向が加倉井古墳群・田島古墳群・牛伏古墳群などにみられることである。前期から中期にかけては、標高約30～50mの低台地に方形周溝墓や古墳が築造されていたが、時代を経ると同時に集落が低台地に増加し、古墳は高い丘陵地へと移っていった様相が見て取れる。^{註1)}

(4) 奈良・平安時代

那珂川下流右岸に国指定史跡である台渡里官衙遺跡群、台渡里廃寺跡、アラヤ遺跡、渡里町遺跡などが調査され、那賀郡衙関連遺跡として注目される。また、生産遺跡としては、北西の前沢川上流に立地する四又入窯跡群、高取山窯跡群〈201-217, S56・58・60 調査〉などの木葉下窯跡群が8世紀初頭から9世紀後半まで操業していた

ことが知られている。当遺跡の隣接地域では40遺跡が確認されているが、調査例は少ない。松原遺跡、釜久保遺跡、松山東遺跡〈201-320〉、池上遺跡〈201-122〉、大塚新地遺跡、金剛寺跡〈201-134〉、仲坪遺跡、北原遺跡〈201-139〉などが知られており、これらの遺跡の多くから木葉下窯跡群産の須恵器が出土している。

これらの時代を通して、当遺跡では桜川の流通の影響を強く受けながら同じ文化圏として、集落や古墳が作られてきたと予想できる。桜川流域の低台地では、縄文時代または弥生時代から奈良・平安時代まで連続して遺跡が形成される中で、立地標高を高めながら古墳時代後期に遺跡数の増加がみられる特徴があり、このような拡散現象の中で当遺跡も存在したと考えられる。

註

- 1) 井博幸氏によれば、標高40～50m付近での古墳は少なく、これは本来存在した古墳を集落造営のために破壊してしまったと理解する。(1999)

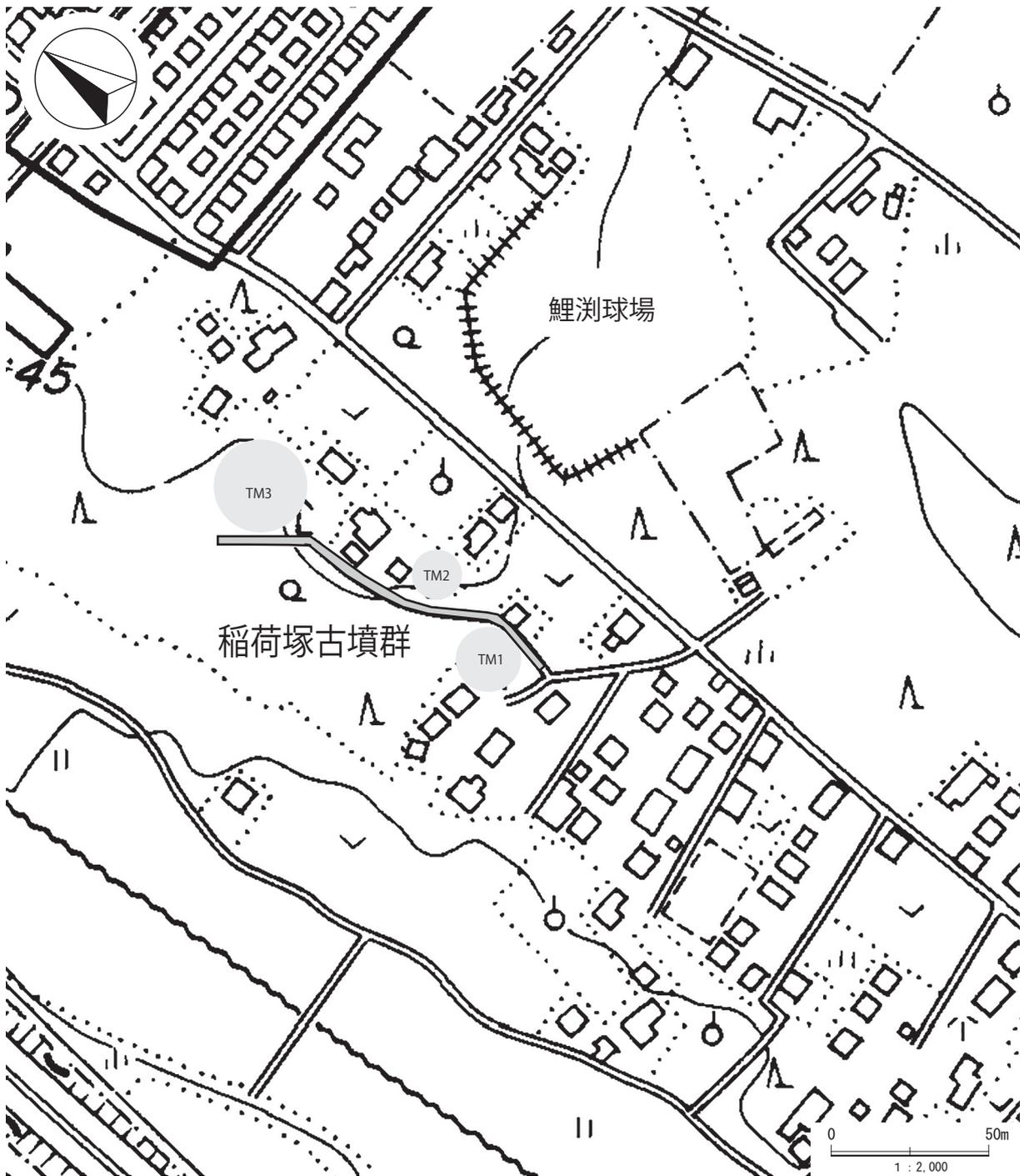
引用・参考文献

- 井 博幸ほか 1999 『牛伏4号墳の調査』 内原町教育委員会
 井上 義安ほか 1999 『水戸市南中坪遺跡 農業集落排水処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 水戸市教育委員会
 蓼沼 香未由ほか 2002 『水戸市南中坪遺跡 精神障害者通所授産施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 水戸市教育委員会・社会福祉法人ひだまり会・株式会社化研
 水戸市教育委員会 2012 『水戸市埋蔵文化財包蔵地分布地図(平成24年度版)』

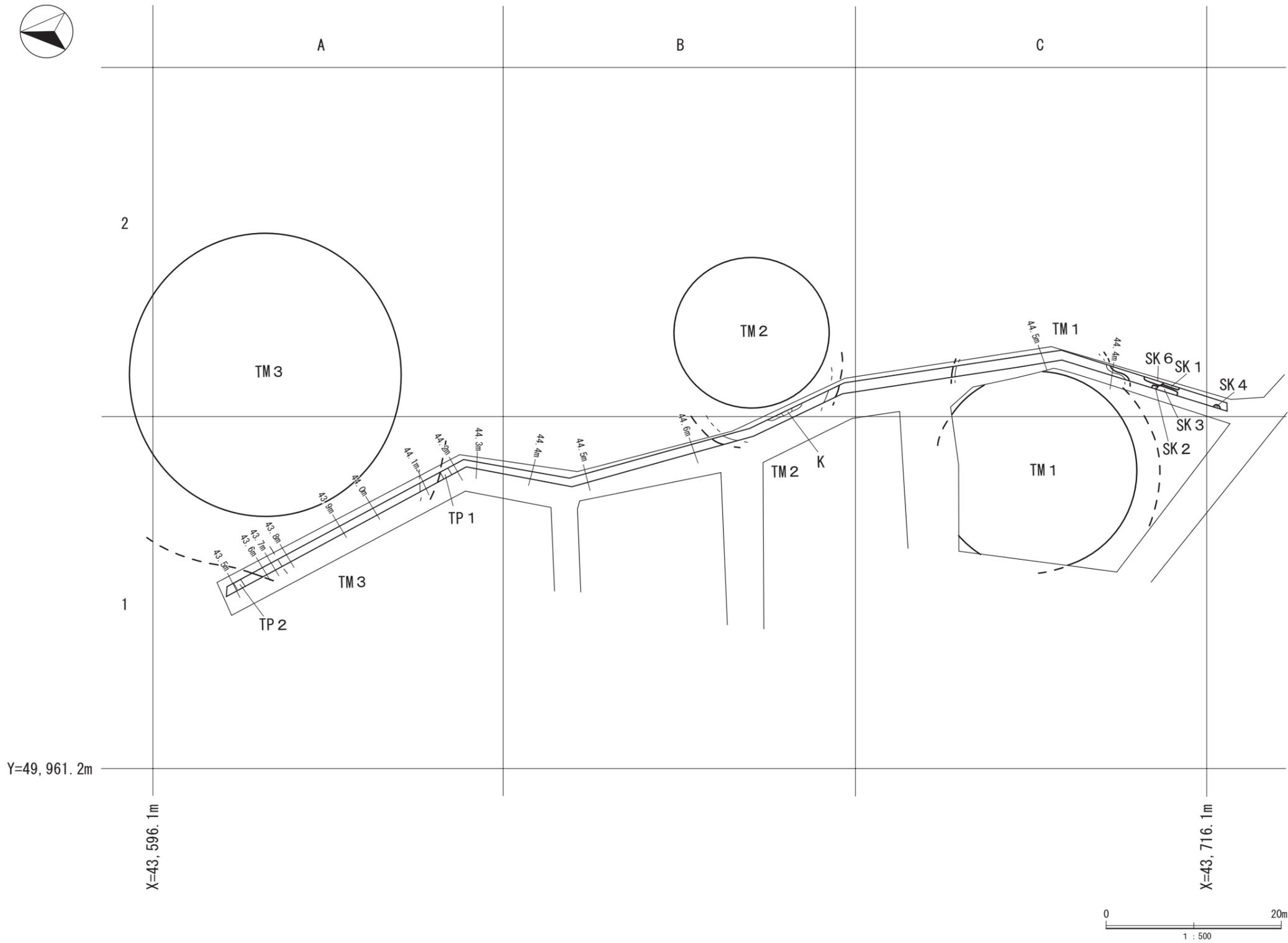
第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世	近世
201-017	一本松遺跡		○		○				201-166	毛勝谷原古墳群				○			
201-042	赤塚遺跡	○	○		○	○			201-168	山田窯跡群				○	○		
201-066	下荒句遺跡		○		○				201-217	高取山窯跡群					○		
201-082	下荒句古墳群				○				201-220	松原遺跡		○	○	○	○		
201-085	赤塚古墳群				○				201-221	稲荷塚古墳群		○	○	○	○	○	
201-086	加倉井古墳群		○	○	○	○			201-222	大塚新地遺跡			○	○	○		
201-087	妙徳寺付近古墳群				○				201-223	飯島古墳群				○			
201-104	加倉井館跡						○		201-286	松山古墳群				○			
201-115	加倉井富士山遺跡		○	○	○				201-310	永代東遺跡							(包蔵地)
201-116	仲坪遺跡				○	○			201-312	開江南遺跡							(包蔵地)
201-117	南仲坪遺跡			○	○	○			201-319	郷中遺跡				○	○		
201-118	金谷遺跡			○	○	○			201-320	松山東遺跡				○	○		
201-119	飯島向原遺跡				(包蔵地)				201-321	大塚池南遺跡				(包蔵地)			
201-120	仙光内遺跡			○	○	○			201-322	榎戸北遺跡				(包蔵地)			
201-122	池上遺跡					○			305-002	遠台遺跡		○	○	○	○	○	
201-123	清水遺跡	○	○	○	○				305-005	二所神社古墳				○			
201-124	釜久保遺跡			○	○	○			305-006	舟塚古墳群				○			
201-129	三ツ児塚古墳群				○	○			305-007	田島古墳群				○			
201-130	後山田遺跡		○		○				305-008	三本松古墳群				○			
201-131	椎農遺跡		○		○	○			305-009	牛伏古墳群				○			
201-132	山田遺跡		○	○	○				305-055	田島城跡						○	
201-134	金剛寺跡		○			○			305-056	大足城跡						○	
201-135	寺山遺跡		○		○				305-063	三野輪古墳群				○			
201-136	峯山古墳				○				305-066	榎巷遺跡			○	○	○		
201-137	向井原遺跡	○	○	○	○				305-068	中道遺跡					○		

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世	近世
201-138	北原古墳群				○				305-069	一戦塚遺跡		○	○	○	○		
201-139	北原遺跡		○		○	○			305-070	長嶋遺跡				○	○	○	
201-145	巡見遺跡		○		○				305-071	寺内遺跡		○	○		○	○	
201-149	全隅権現台遺跡		○						305-072	大城遺跡		○	○	○	○	○	
201-150	大久保遺跡				○				305-073	根崎遺跡			○		○		
201-151	永代トヤ遺跡		○		○	○			305-074	合ノ田遺跡			○	○	○		
201-153	開江宿遺跡					○			305-075	沖前遺跡		○			○		
201-163	大久保古墳群				○				305-076	田島権現台遺跡				○	○		
201-164	毛勝谷原遺跡			○	○				305-090	坊ノ内遺跡						○	
201-165	加倉井原遺跡				○				305-092	原ノ内遺跡		○				○	



第2図 遺跡位置図 (『水戸市都市計画図 工事用図面』2019年水戸市上下水道局提供に加筆)



第3図 遺跡全体図・調査区設定図 (TM1～3の墳丘範囲は調査区外であるため推定ラインである。)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

稲荷塚古墳群は、水戸市の西部に位置し、桜川の支流東側の標高44mの台地上に立地している。古墳群の西側に桜川支流と低地を望み、東側には上市台地が広がっている。調査面積は153㎡で、調査前の現況は道路である。古墳群の範囲は、南北130m、東西90mに渡っており、現在墳丘を確認できるのは円墳3基である。なお、今回の調査区域は墳丘の間を縫って設定され、3基の墳丘自体は調査対象にはなっていない。また、調査区全域に渡って、平成20年に宅地開発のために墳丘を避けて墳丘確認面（旧地表面）より掘削を行って整地した様子が確認された。結果、現地表面から20～50cmの攪乱部分が広がり、北側にいくほど遺構の保存状態が悪い。

調査の結果、古墳の周溝3条（古墳時代）、土坑5基（中世以降）を検出した。遺跡は、古墳時代後期の古墳群と奈良時代の包蔵地である。

遺物は、収納コンテナ（60×40×20cm）に1箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（広口壺）、土師器（坏・高台付坏・甕）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・甕）、土製品（円筒埴輪・朝顔形埴輪・象形埴輪）、石器（剥片）などである。

今回の調査では、円墳3基に伴う周溝が確認され、周溝の覆土中から土師器片、須恵器片、埴輪片が出土している。古墳の構造、周溝埋没時の時期決定の貴重な資料となった。

第2節 基本土層

基本層序を確認するテストピット（TP）は、調査区北部の第3号墳周溝が確認された斜面部に2カ所設定した。TP1の標高は44.1m、TP2の標高は43.5mで、地表面からそれぞれ約2m下まで掘削し、その基本土層図を第4図に示した。土層は13層に分層され、第1～3層が表土層（耕作土層・腐食土層）、第4～9層がソフトローム層、第10～13層がハードローム層で関東ローム層に対比される。以下、TP1とTP2を対応させながら、各層の特徴を述べる。

第1層は褐色の耕作土層及び腐植土層である。粘性・締まりは弱く、層厚は8～12cmである。なお、攪乱のためにTP2では確認できなかった。

第2層は、ロームブロック・ローム粒子を中量含む暗褐色土である。粘性・締まりは普通で、層厚は15～30cmである。斜面部に堆積したソフトロームへの漸移層と考えられる。

第3層は、ローム粒子を中量含む褐色のソフトロームへの漸移層ある。粘性はなく、締まりは普通で、層厚は6～15cmである。なお、TP2では本層を確認できなかった。

なお、今市・七本桜軽石層は確認できなかった。

第4層は褐色のソフトローム層である。粘性はなく、締まりが強い。層厚は10～17cmで、TP2では本層を確認できなかった。

第5層は明黄褐色のソフトローム層である。粘性は普通で、締まりはない。層厚はⅢ区で10～20cmで、TP2では本層を確認できなかった。

第6層は明黄褐色のソフトローム層で、赤色粒子（スコリア）を微量含み、粘性はなく、締まりが強い。層厚は6～16cmで、TP2では本層を確認できなかった。

第7層は黄褐色のソフトローム層で、赤色粒子（スコリア）を微量、白色粒子（パミス）・黒色粒子を少量含み、粘性・締まりとも普通で、層厚は10～26cmである。なお、TP1では本

層を確認できなかった。

第8層はにぶい黄色のソフトローム層で、粘性は弱く、締まりは強い。層厚は1～36cmである。なお、T P 1では本層を確認できなかった。

第9層は浅黄色のソフトローム層である。白色粒子（パミス）を少量含み、粘性が強く、締まりは普通である。層厚は11cm～28cmである。なお、T P 1では本層を確認できなかった。

第10層は明黄褐色のハードローム層である。粘性は弱く、締まりは普通で、層厚は12～30cmである。T P 2では本層を確認できなかった。

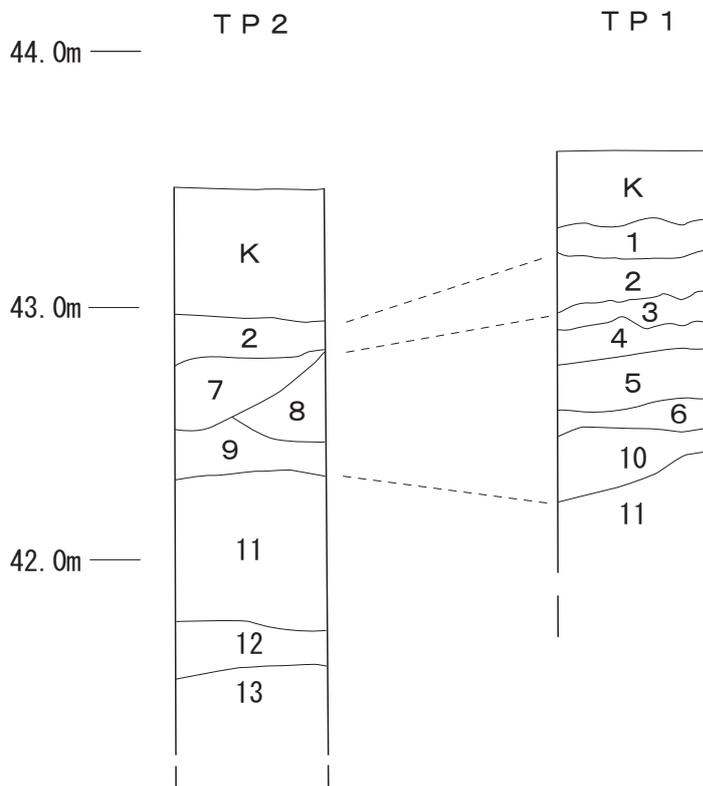
第11層は浅黄色のハードローム層である。赤色粒子（スコリア）を少量含み、粘性は普通で、締まり強い。層厚は30～60cmであり、T P 1からT P 2にかけて多量に堆積する状況がみられる。

第12層は浅黄色のハードローム層である。粘性は普通で、締まりは強く、層厚は8～24cmである。

第13層は浅黄色のハードローム層である。粘性・締まりとも強く、特に粘性は第12層より強く、粘土層の直上層である。層厚は12～20cmである。

なお、テストピットを斜面部に設置したため、T P 1とT P 2の標高差と地層の堆積状況はだいぶ異なることが分かる。A T層や第2黒色帯を確認することは難しかった。

遺構は、第3号墳周溝を除き、第4層上面で確認した。第3号墳周溝は斜面部に構築されているため、第4層上面から第11層中で確認した。特に、地表面から25cmを整地して宅地開発が行われたため、耕作土層の残存率が低く、ソフトロームまで達している範囲も多く、上面を削除されている遺構がほとんどであった。

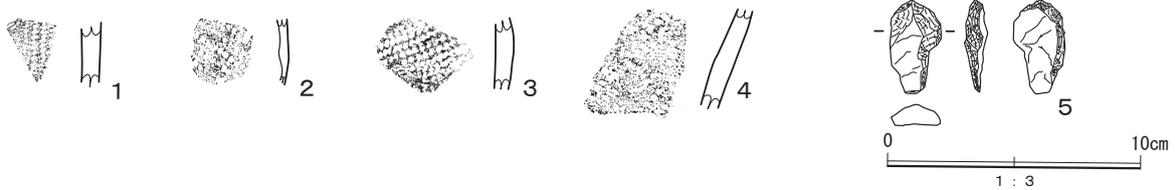


第4図 基本土層図

第3節 検出された遺構と遺物

(1) 縄文時代 (第5図, 第2表, PL10)

本調査では、縄文時代の遺構は検出されなかったが、遺物は縄文土器深鉢が4点、剥片1点が出土している。土器はいずれも細片で、古墳の周溝の覆土中と墳丘上から採集されたものであり、時期は縄文時代中期と考えられる。以下、遺物について記述する。



第5図 縄文時代出土遺物実測図

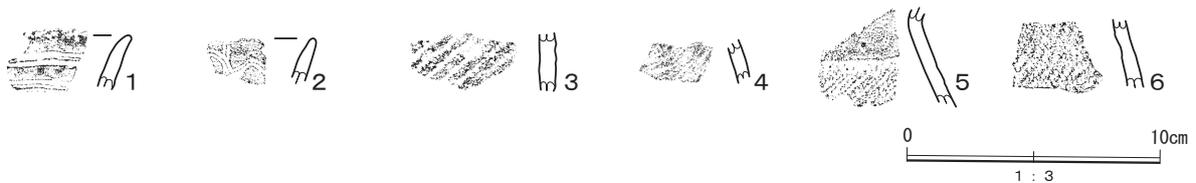
第2表 縄文時代出土遺物観察表 (第5図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考 (残存率・形式・焼成窯・図版等)
1	縄文土器	深鉢	—	(2.6)	—	(3.9)	長石	7.5YR5/4 にぶい褐色	普通	単節縄文LR施文, 内面ナデ	TM1 覆土中	胴部, 5%, 図版10, 中期
2	縄文土器	深鉢	—	(2.7)	—	(2.9)	長石・石英	10YR7/3 にぶい黄褐色	普通	単節縄文LR施文	TM1 覆土中	胴部, 5%, 図版10, 中期
3	縄文土器	深鉢	—	(2.8)	—	(8.4)	長石・石英	10YR5/3 にぶい黄褐色	普通	単節縄文LR施文, 内面ナデ	TM1 覆土中	胴部, 5%, 図版10, 中期
4	縄文土器	深鉢	—	(4.0)	—	(15.6)	長石・石英	7.5YR6/6 橙色	普通	単節縄文LR施文	TM2 覆土中	胴部, 5%, 図版10, 加曾利E式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考 (残存率・形式・焼成窯・図版等)
5	剥片	3.7	2.0	0.9	5.5	石英	縦長剥片, 両端打法によるものか	TM1 覆土中	色調: 灰白色 (5YR8/2), 図版10

(2) 弥生時代 (第6図, 第3表, PL10)

本調査では、弥生時代の遺構は検出されなかった。遺物は弥生土器広口壺が6点出している。すべて細片で、こちらも古墳の周溝の覆土中と墳丘上から採集されたものである。時期は弥生時代後期の十王台式期, またはそれと同時期のものと考えられる。以下、遺物について記述する。



第6図 弥生時代出土遺物実測図

第3表 弥生時代出土遺物観察表（第6図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考 (残存率・形式・焼成窯・図版等)
1	弥生土器	広口壺	—	(2.2)	—	(5.4)	長石・石英	10YR3/2 黒褐色	普通	口唇部原体による押圧、半截竹管による沈線文、内面ナデ	T M 3 覆土中	口縁部、5%、図版10、 後期十王台式
2	弥生土器	広口壺	—	(1.8)	—	(3.1)	長石	7.5YR7/4 にぶい橙色	普通	口唇部一部剥離、半截竹管による波状施文、内面ナデ	T M 3 墳丘上採集	口縁部、5%、図版10 後期十王台式
3	弥生土器	広口壺	—	(2.3)	—	(8.0)	長石・石英	10YR7/4 にぶい黄褐色	普通	撚り糸による押圧文、内面ナデ	T M 3 覆土中	胴部、5%、図版10、 後期
4	弥生土器	広口壺	—	(1.6)	—	(3.4)	長石・石英	10YR7/4 にぶい黄褐色	普通	撚り糸による押圧文、内面ナデ	T M 3	胴部、5%、図版10、 後期
5	弥生土器	広口壺	—	(4.0)	—	(9.2)	長石・石英	10YR6/4 にぶい黄褐色	普通	胴部上位ナデ、半截竹管による押圧と単節縄文LR施文、内面ナデ	T M 3 墳丘上採集	胴部、5%、図版10、 後期
6	弥生土器	広口壺	—	(2.7)	—	(7.8)	長石・石英	7.5YR6/4 にぶい橙色	普通	単節縄文LRにより羽状施文、内面ナデ	T M 3 墳丘上採集	胴部、5%、図版10、 後期

(3) 古墳・奈良時代

本調査では、当該期の遺構として、既知の円墳3基に伴う周溝が確認された。しかし、調査区域が狭く、住宅地として整地されたため、掘削や道路舗装工事などによる痕がすべてのエリアに渡って確認され、地表面下約25cmの浅い場所から約1m40cmの深い場所まで攪乱されており、周溝の形態や規模の全容は確認できなかった。また、奈良時代の遺構は検出されなかった。

出土した遺物は、土師器が53点、須恵器17点、埴輪88点、礫4点である。古墳時代の遺物はほとんど埴輪で、周溝の覆土中から出土した細片と墳丘上から採集されたものであり、時期は6世紀中葉から後半頃と考えられる。また、土師器と須恵器は70%弱が古墳の周溝の覆土中から出土し、時期はほとんど8世紀前葉から中葉にかけてのもので、特に須恵器は近隣の木葉下窯跡群から供給されたともと考えられる。以下、遺構と遺物について記述する。

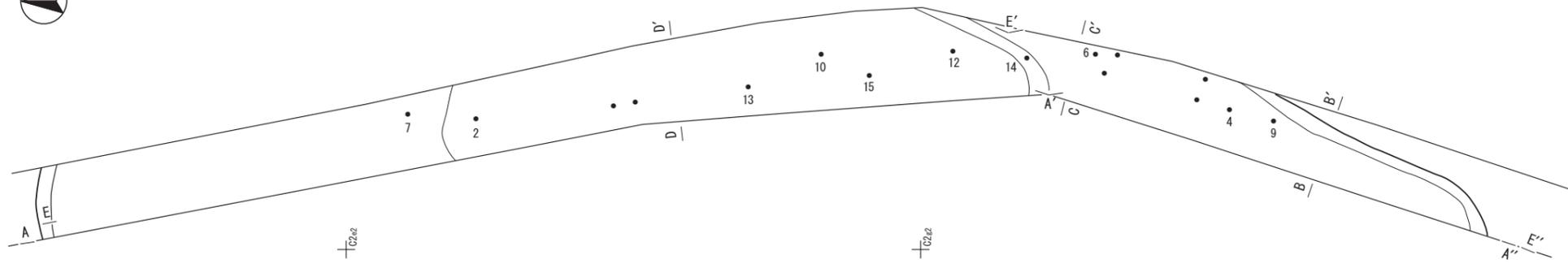
第1号墳（第7・8図、第4表、PL 1～3・10～12）

位置 古墳は調査区南部の脇C1d7～C1g10区、標高44.0mの台地平坦部に位置している。

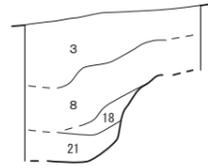
確認状況 墳丘の東側調査区のC2c2～C2h2区、舗装された住宅地への進入路の約37～100cm下から周溝が確認された。全周しているとする約1/6程度の確認である。規模と形状 現況では、周溝内縁で推定径約25m、高さ3.5mの円墳と考えられる。墳頂平坦面は狭く、頂部に小祠がある。

周溝 墳丘の東側部分のみ確認。全周しているかどうかは不明である。調査区の位置関係から上幅、下幅とも不明であるが、95cm幅のトレンチで18mほど確認した。深さは28～90cmである。壁は垂直、または外傾して立ち上がり、断面形は不整形である。覆土は、24層に分けられる。17層～24層までがレンズ状の堆積状況を示す自然堆積、1層～16層までがブロック状の堆積を示す人為堆積である。

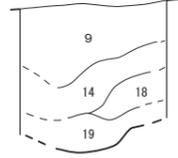
遺物出土状況 周溝の覆土中から土師器29点（坏・高台付坏・甕）、須恵器11点（坏・高台付坏・蓋・盤・甕）、墳丘上から土師器3点（甕）が出土している。その他にも、



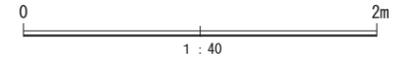
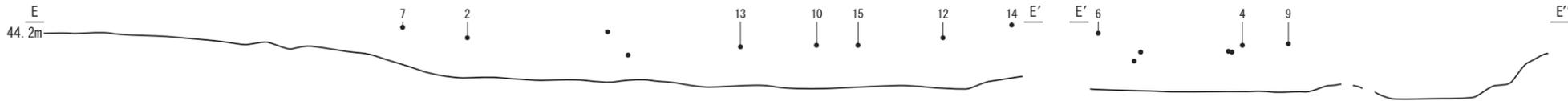
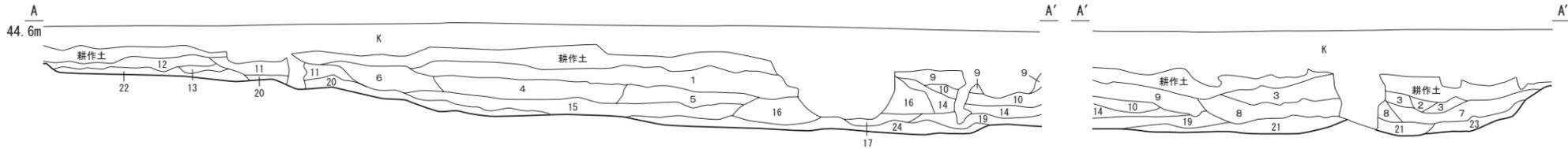
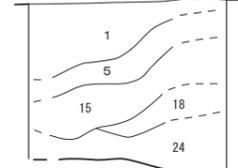
B
44.2m B'



C
44.2m C'



D
44.2m D'

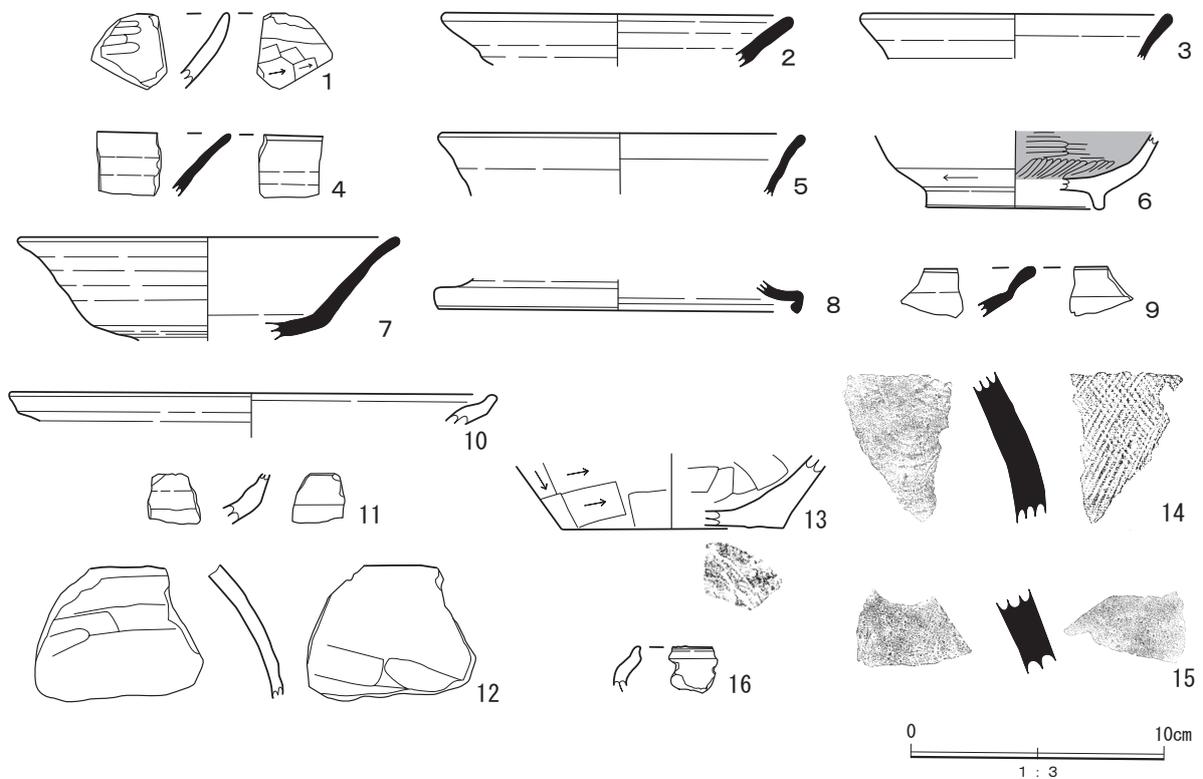


- | | |
|---|--|
| 1 7.5YR4/2 灰褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子中量 粘性弱く, 締まりあり | 13 7.5YR3/4 暗褐色 ローム中ブロック中量 粘性強く, 締まりあり |
| 2 7.5YR4/3 褐色 ローム大ブロック多量 粘性・締まり強 | 14 7.5YR3/3 暗褐色 ローム中ブロック少量, ローム粒子中量 粘性あり, 締まり弱 |
| 3 7.5YR5/2 灰褐色 ローム粒子少量 粘性強く, 締まりあり | 15 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒子中量 粘性・締まりともにあり |
| 4 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒子中量 粘性・締まりあり | 16 7.5YR3/2 黒褐色 ローム小ブロック少量 粘性あり, 締まり強 |
| 5 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 粘性あり, 締まり弱 | 17 7.5YR3/2 黒褐色 ローム粒子中量 粘性あり, 締まり弱 |
| 6 7.5YR3/2 黒褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子中量 粘性あり, 締まり弱 | 18 7.5YR3/4 暗褐色 ローム中ブロック中量 粘性・締まりともにあり |
| 7 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒子中量 粘性・締まりともに弱 | 19 7.5YR4/3 褐色 ローム大ブロック多量 粘性弱く, 締まりあり |
| 8 7.5YR4/3 褐色 ローム粒子微量 粘性あり, 締まり弱 | 20 7.5YR4/4 褐色 ローム大ブロック中量 粘性強く, 締まりあり |
| 9 7.5YR4/2 灰褐色 ローム粒子中量 粘性強く, 締まりあり | 21 7.5YR4/4 褐色 ローム中ブロック中量 粘性・締まりともにあり |
| 10 7.5YR3/2 黒褐色 ローム粒子少量 粘性強く, 締まりあり | 22 7.5YR4/4 褐色 ローム大ブロック多量 粘性強く, 締まりあり |
| 11 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 粘性・締まりともにあり | 23 7.5YR4/3 褐色 ローム中ブロック多量 粘性あり, 締まり強 |
| 12 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子多量 粘性・締まりともにあり | 24 7.5YR4/4 褐色 ローム中ブロック中量, ローム粒子微量 粘性あり, 締まり強 |

第7図 第1号墳遺構図

混入あるいは流入した縄文土器3点，剥片1点が出土している。埴輪の出土は一片もない。周溝から出土した土器は，周溝の底面から約60～100cmの高さで，同一の層から出土しているものが多い。特に，出土した須恵器は，ほとんどが木葉下窯跡群産の8世紀第2四半期前葉から中葉にかけての製品と考えられる。周溝が埋没する過程で投棄されたものか，墳丘上に供献されていた土器が流れ込んだものかは不明である。

所見 古墳は全体的に削平されており，とくに東側の改変が著しい。墳頂や墳丘に花崗岩の割石が散在している。周溝は一部のみの調査であったため，詳しい特徴の把握は難しく，墳丘の測量調査も行われていないため，正確な墳丘規模も不明である。今後の調査に期待したい。検出された遺物は同じ層から出土した土器が多いことから，奈良時代中期以降に他の遺構によって掘り込まれた可能性は低い。古墳の築造時期は，埴輪を伴っていないことから，7世紀初頃と推定され，8世紀前半に埋没したと考えられる。



第8図 第1号墳出土遺物実測図

第4表 第1号墳出土遺物観察表（第8図、墳丘上採集を含む）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考 (残存率・形式・焼成窯・図版等)
1	土師器	坏	—	(2.8)	—	(6.9)	長石・石英・白色粒子	2.5YR5/6 明赤褐色	普通	体部外面手持ちへら削り、 内外面へら磨き	覆土中	口縁～体部5%， 図版10
2	須恵器	坏	[13.5]	(2.0)	—	(5.4)	砂粒・雲母・ 海綿骨針	5Y5/1 灰色	普通	ロクロ水挽き成形、内外面 ロクロナデ	覆土 上層	口縁～体部5%，木葉下 窯跡群産，図版10
3	須恵器	坏	[11.9]	(1.8)	—	(2.6)	石英・小礫	10YR7/2 にぶい黄褐色	普通	ロクロ水挽き成形、内外面 ロクロナデ	覆土中	口縁～体部5%，木葉下 窯跡群産，図版10
4	須恵器	坏	—	(2.5)	—	(4.8)	長石・白色 粒子	10YR5/1 褐灰色	普通	ロクロ水挽き成形、内外面 ロクロナデ	覆土 上層	口縁～体部5%，木葉下 窯跡群産，図版10
5	須恵器	坏	[14.0]	(2.4)	—	(3.6)	石英・小礫	10YR6/1 褐灰色	普通	ロクロ水挽き成形、内外面 ロクロナデ	覆土中	口縁～体部5%，木葉下 窯跡群産，図版10
6	土師器	高台付坏	—	(3.0)	[6.8]	(29.4)	雲母・石英・ 赤色粒子・ 海綿骨針	7.5YR6/4 にぶい橙色	普通	体部外面下位回転へら削り、 内面黒色処理後にへら磨き	覆土 上層	体縁～高台部15%， 図版12
7	須恵器	高台付坏	[14.8]	(4.1)	—	(18.6)	長石・石英・ 小礫	10YR6/1 褐灰色	普通	ロクロ水挽き成形、内外面 ロクロナデ	覆土 上層	口縁～底部15%，木葉 下窯跡群産，図版10
8	須恵器	蓋	[14.0]	(1.2)	—	(2.3)	長石・石英	10YR5/1 褐灰色	普通	ロクロ水挽き成形、内外面 ロクロナデ	覆土中	口縁～体部5%，木葉下 窯跡群産，図版10
9	須恵器	盤	—	(1.9)	—	(3.2)	白色粒子	10YR5/1 褐灰色	普通	ロクロ水挽き成形、内外面 ロクロナデ，外面自然釉	覆土 上層	口縁～体部5%，木葉下 窯跡群産，図版10
10	土師器	甕	[18.8]	(1.2)	—	(9.6)	長石・石英	7.5YR6/4 にぶい橙色	普通	内外面横ナデ	覆土 上層	口縁5%， 図版11
11	土師器	甕	—	(2.0)	—	(3.6)	長石・石英	7.5YR5/3 にぶい褐色	普通	内外面横ナデ	覆土中	口縁5%， 図版11
12	土師器	甕	—	(5.4)	—	(27.5)	長石・石英・ 雲母	5YR5/4 にぶい赤褐色	普通	内外面ナデ	覆土 上層	体部5%， 図版11
13	土師器	甕	—	(2.2)	[6.4]	(18.5)	長石・石英・ 白色粒子	5YR6/6 橙色	普通	体部へら削り，内面ナデ， 木葉痕	覆土 上層	底部5%， 図版11
14	須恵器	甕	—	(6.1)	—	(40.4)	長石・石英・ 小礫・海綿 骨針	5Y5/1 灰色	普通	体部外面斜縦位・横位に平 行叩き，内面当て具痕	覆土 上層	体部5%，木葉下窯跡群 産，図版11
15	須恵器	甕	—	(3.3)	—	(21.9)	長石・石英・ 小礫・海綿 骨針	5Y5/1 灰色	普通	内面同心円状の当て具痕	覆土 上層	体部5%，木葉下窯跡群 産，図版11
16	土師器	甕	—	(1.8)	—	(2.1)	長石・石英	5YR5/4 にぶい赤褐色	普通	内外面横ナデ	T M 1 墳丘上採集	口縁5%， 図版11

第2号墳（第9・10図，第5表，PL 1・4・5・11～15）

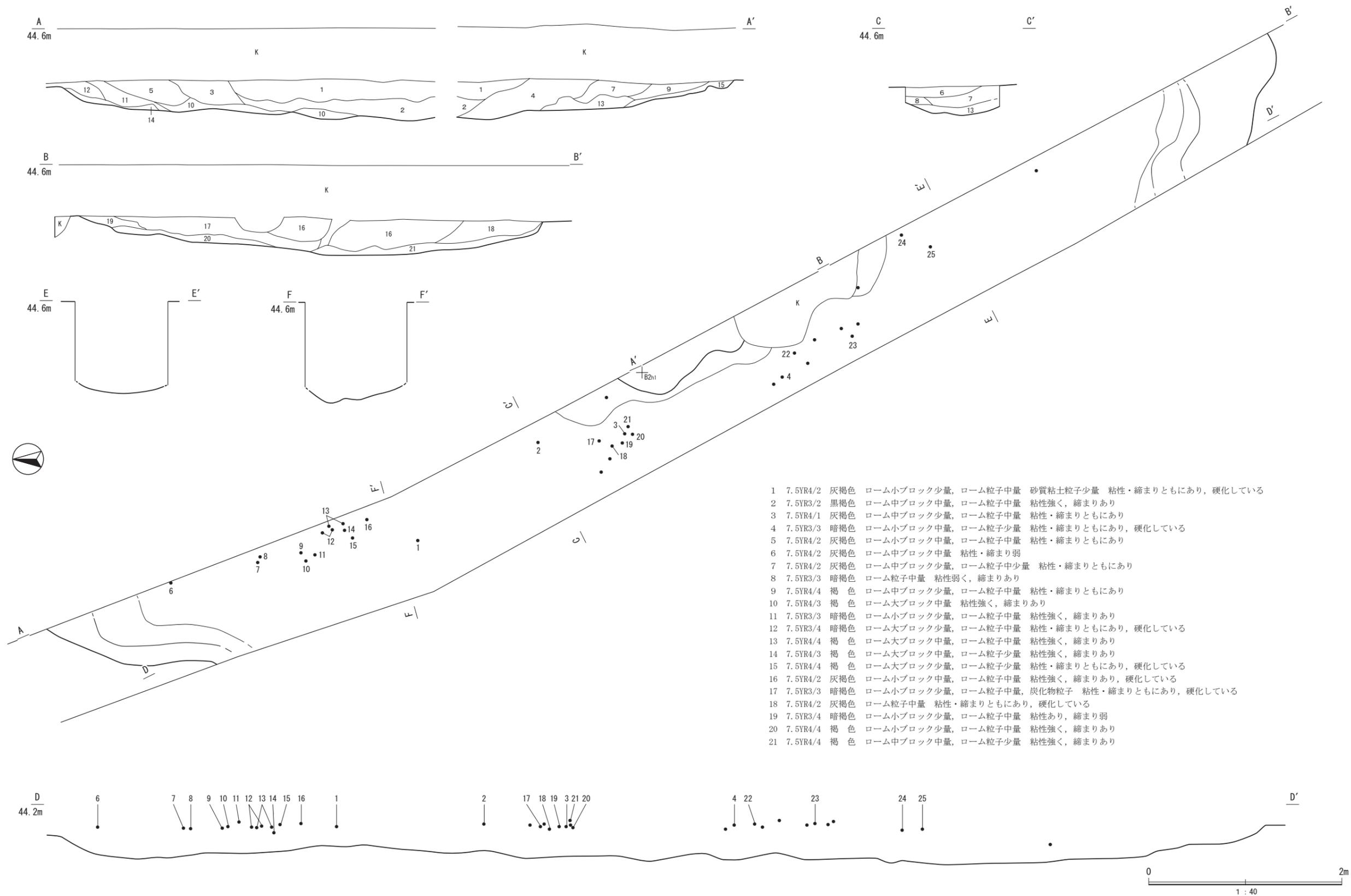
位置 古墳は，調査区中央部のB 2 g1～B 2 i3区，標高44.0mの台地平坦部に位置している。

確認状況 墳丘の西側は，住宅整備で裾野面から約20cm下げられ平坦に整地されている。その調査区のB 1 g10～B 2 j1区，舗装された住宅地への進入路の約60cm下から周溝が確認された。全周しているとすると約1/6程度の確認である。

規模と形状 現況では，周溝内縁で推定径約18m，高さ約2.5mの円墳と考えられる。墳丘規模に対して頂部平坦面が広く小祠がある。

周溝 墳丘の西側部分のみ確認。周溝が回る内側の際に地山が確認できること，頂部から半径約10m東側の裾の脇の地表面が若干緩くくぼみがちであることから，全周している可能性が高い。上幅5.1～6.2m，下幅3.8～4.25m，深さは15～50cmである。壁は外傾して緩やかに立ち上がり，断面形は皿状である。覆土は，21層に分けられる。14・15・20・21層がレンズ状の堆積状況を示す自然堆積，1層～13層，16層～19層までがブロック状の堆積を示す人為堆積である。

遺物出土状況 周溝の覆土中から円筒埴輪40点・朝顔形円筒埴輪3点・象形埴輪1点が出土し，墳丘上から土師器17点（甕），須恵器1点（蓋），円筒埴輪43点・朝顔形円筒埴輪1点を採集した。その他，混入あるいは流入した縄文土器1点が出土している。



- | | | | | | |
|----|----------|-----|----------------------|----------|---------------------|
| 1 | 7.5YR4/2 | 灰褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 | 砂質粘土粒子少量 | 粘性・縮まりともにあり, 硬化している |
| 2 | 7.5YR3/2 | 黒褐色 | ローム中ブロック中量, ローム粒子中量 | | 粘性強く, 縮まりあり |
| 3 | 7.5YR4/1 | 灰褐色 | ローム中ブロック少量, ローム粒子中量 | | 粘性・縮まりともにあり |
| 4 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | ローム小ブロック中量, ローム粒子少量 | | 粘性・縮まりともにあり, 硬化している |
| 5 | 7.5YR4/2 | 灰褐色 | ローム小ブロック中量, ローム粒子中量 | | 粘性・縮まりともにあり |
| 6 | 7.5YR4/2 | 灰褐色 | ローム中ブロック中量 | | 粘性・縮まり弱 |
| 7 | 7.5YR4/2 | 灰褐色 | ローム中ブロック少量, ローム粒子中少量 | | 粘性・縮まりともにあり |
| 8 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | ローム粒子中量 | | 粘性弱く, 縮まりあり |
| 9 | 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム中ブロック少量, ローム粒子中量 | | 粘性・縮まりともにあり |
| 10 | 7.5YR4/3 | 褐色 | ローム大ブロック中量 | | 粘性強く, 縮まりあり |
| 11 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 | | 粘性強く, 縮まりあり |
| 12 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム大ブロック少量, ローム粒子中量 | | 粘性・縮まりともにあり, 硬化している |
| 13 | 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム大ブロック中量, ローム粒子中量 | | 粘性強く, 縮まりあり |
| 14 | 7.5YR4/3 | 褐色 | ローム大ブロック中量, ローム粒子少量 | | 粘性強く, 縮まりあり |
| 15 | 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム大ブロック少量, ローム粒子少量 | | 粘性・縮まりともにあり, 硬化している |
| 16 | 7.5YR4/2 | 灰褐色 | ローム小ブロック中量, ローム粒子中量 | | 粘性強く, 縮まりあり, 硬化している |
| 17 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子中量, | 炭化物粒子 | 粘性・縮まりともにあり, 硬化している |
| 18 | 7.5YR4/2 | 灰褐色 | ローム粒子中量 | | 粘性・縮まりともにあり, 硬化している |
| 19 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 | | 粘性あり, 縮まり弱 |
| 20 | 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 | | 粘性強く, 縮まりあり |
| 21 | 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム中ブロック中量, ローム粒子少量 | | 粘性強く, 縮まりあり |

第9図 第2号墳遺構図

周溝から出土した埴輪は、数点を除いて、地表面からの攪乱直下、周溝の底面から約30～40cmの高さで一様に出土しており、墳丘上に樹立していた埴輪が流れ込んだものと考えられる。埴輪は、胎土や外面調整の特徴から3つの類型に分類でき、複数の埴輪工人の関与が推測される。特に、表面一部に赤彩が遺存するTM2-23、脚部の可能性があるTM2-28が注目される。

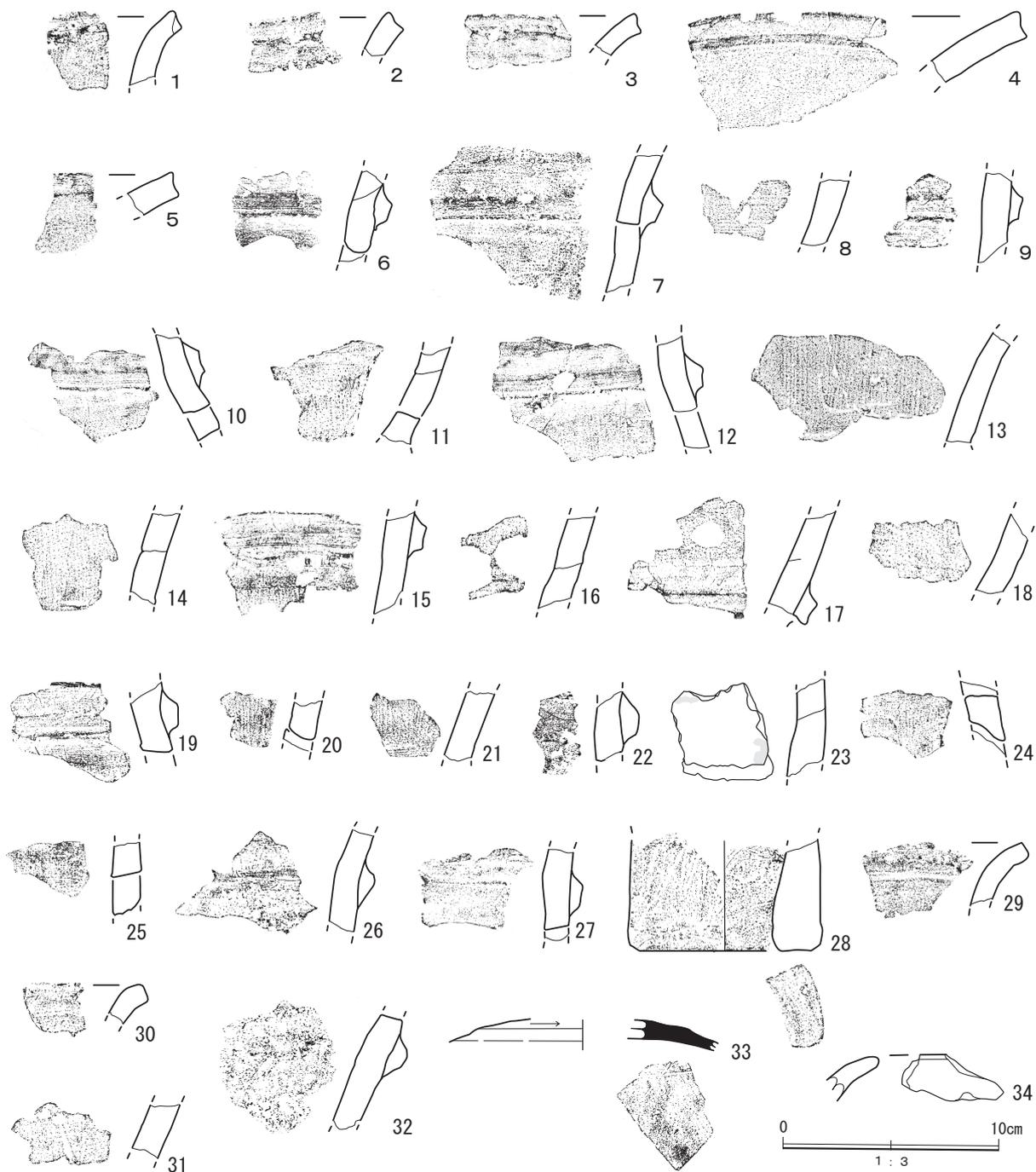
所見 小規模な改変は認められるが、墳頂に小祠を祭っており遺存状況は比較的よい。確認調査と簡易計測によって判明した墳丘規模は、径約18m、高さ2.5mで、幅5～6m・深さ1m前後の幅広い周溝が巡る円墳で、径約10mの頂部平坦面をもつ。

埋設施設については判然としないが、墳頂に径1m弱の扁平な花崗岩があり、墳端から東側約5mの地点にも同質・同大の石材が遺存する。この石材が埋葬施設に関係するか否かで想定される主体部の構造は異なることになる。すなわち、石材が主体部の蓋石として利用されたとみれば、初現的な小型の横穴式石室か箱型石棺の可能性が考えられる。いっぽう、後世の祠の設置に伴って搬入されたとみなせば古墳との関係は否定され、木棺直葬などの竪穴系の埋葬施設と想定されるが、調査を経ない現状ではどちらとも決めかねる。今後の課題である。

埴輪は墳丘と墳丘中段の2段に樹立されていたと考えられ、円筒埴輪・朝顔形埴輪のほか形象埴輪など、小型古墳の割には充実した埴輪構成である。現存する3基の古墳では最も古く位置付けられ、6世紀中葉から後半の築造と推定される。

第5表 第2号墳出土遺物観察表(第10図, 墳丘上採集を含む)

番号	器種	径・幅	器高	厚さ	底径	重量	胎土	色調	手法の特徴	出土位置	備考 (残存率・形式・焼成窯・図版等)
1	円筒埴輪	—	(3.5)	—	—	(14.5)	長石・石英	5YR5/6 明赤褐色	外面縦ハケ、内面ヘラナデ、口唇部横位ヘラナデ	覆土下層	口縁部5%, 図版12
2	朝顔形 円筒埴輪	—	(2.0)	—	—	(12.0)	長石・石英	5YR6/6 橙色	内面ヘラナデ、口唇部横位ヘラナデ	覆土下層	口縁部5%, 図版12
3	朝顔形 円筒埴輪	—	(1.9)	—	—	(14.2)	長石・石英	5YR5/6 明赤褐色	外面縦ハケ、内面ヘラナデ、口唇部横位ヘラナデ	覆土下層	口縁部5%, 図版12
4	朝顔形 円筒埴輪	—	(3.3)	—	—	(70.1)	長石・石英	5YR6/6 橙色	外面縦ハケ、内面ナデ、口唇部横位ヘラナデ	覆土下層	口縁部5%, 図版12
5	円筒埴輪	—	(2.0)	—	—	(9.4)	長石・石英	5YR5/6 明赤褐色	外面縦ハケ、内面ナデ、口唇部横位ヘラナデ	覆土中	口縁部5%, 図版12
6	円筒埴輪	—	(4.3)	—	—	(34.1)	長石・石英・ 雲母	5YR6/6 橙色	外面横ナデ、内面ヘラナデ、凸帯断面台形、透孔・輪積痕有り	覆土下層	胴部5%, 図版12
7	円筒埴輪	—	(6.5)	—	—	(92.0)	長石・石英・ 雲母	5YR5/6 明赤褐色	外面縦ハケ・横ナデ、内面ヘラナデ、凸帯断面台形、透孔有り	覆土下層	胴部5%, 図版13
8	円筒埴輪	—	(2.9)	—	—	(19.5)	長石・石英	5YR6/6 橙色	外面縦ハケ、内面ナデ	覆土下層	胴部5%, 図版13
9	円筒埴輪	—	(4.1)	—	—	(22.2)	長石・石英	5YR5/6 明赤褐色	外面横ナデ、内面ナデ、凸帯断面台形	覆土下層	胴部5%, 図版13
10	円筒埴輪	—	(5.0)	—	—	(63.2)	長石・石英	5YR6/6 橙色	外面縦ハケ・横ナデ、内面ヘラナデ、凸帯断面台形、透孔有り	覆土下層	胴部5%, 図版13
11	円筒埴輪	—	(4.5)	—	—	(31.6)	長石・石英	5YR5/6 明赤褐色	外面縦ハケ・横ナデ、内面ヘラナデ、透孔・輪積痕有り	覆土下層	胴部5%, 図版13
12	円筒埴輪	—	(5.9)	—	—	(71.7)	長石・石英	5YR6/6 橙色	外面縦ハケ・横ナデ、内面ヘラナデ、凸帯断面台形、透孔有り	覆土下層	胴部5%, 図版13
13	円筒埴輪	—	(5.1)	—	—	(61.8)	長石・石英・ 小礫	5YR5/6 明赤褐色	外面縦ハケ・横ナデ、内面ヘラナデ	覆土下層	胴部5%, 図版13
14	円筒埴輪	—	(4.2)	—	—	(33.0)	長石・石英	5YR6/6 橙色	外面縦ハケ、内面ヘラナデ、輪積痕有り	覆土下層	胴部5%, 図版13



第 10 图 第 2 号墳出土遺物実測図

番号	器種	径・幅	器高	厚さ	底径	重量	胎土	色調	手法の特徴	出土位置	備考 (残存率・形式・焼成窯・図版等)
15	円筒埴輪	—	(5.0)	—	—	(57.52)	長石・石英・小礫	5YR5/6 明赤褐色	外面縦ハケ・横ナデ, 内面ヘラナデ, 凸帯断面台形	覆土 下層	胴部5%, 図版14
16	円筒埴輪	—	(4.3)	—	—	(14.5)	長石・石英・小礫	5YR6/6 橙色	外面縦ハケ・横ナデ, 内面ヘラナデ, 輪積痕有り	覆土 下層	胴部5%, 図版14
17	円筒埴輪	—	(5.3)	—	—	(49.0)	長石・石英	5YR5/6 明赤褐色	外面縦ハケ・横ナデ, 内面ヘラナデ, 凸帯断面台形, 輪積痕有り	覆土 下層	胴部5%, 図版14
18	円筒埴輪	—	(3.8)	—	—	(32.8)	長石・石英	5YR6/6 橙色	外面縦ハケ・横ナデ, 内面ヘラナ デ	覆土 下層	胴部5%, 図版14
19	円筒埴輪	—	(4.0)	—	—	(35.8)	長石・石英	5YR5/6 明赤褐色	外面縦ハケ・横ナデ, 内面ヘラナデ, 凸帯断面台形, 透孔有り	覆土 下層	胴部5%, 図版14
20	円筒埴輪	—	(2.3)	—	—	(9.0)	長石・石英	5YR6/6 橙色	外面縦ハケ, 内面ナデ, 透孔有り	覆土 下層	胴部5%, 図版14
21	円筒埴輪	—	(3.3)	—	—	(17.1)	長石・石英	5YR5/6 明赤褐色	外面縦ハケ・横ナデ, 内面ヘラナ デ	覆土 下層	胴部5%, 図版14
22	円筒埴輪	—	(3.2)	—	—	(12.7)	長石・石英・ 小礫・白色 粒子	5YR6/6 橙色	外面横ナデ, 内面ヘラナデ, 凸帯 断面台形	覆土 下層	胴部5%, 図版14
23	円筒埴輪	—	(4.5)	—	—	(30.0)	長石・石英	5YR5/6 明赤褐色	外面横ナデ, 内面ヘラナデ, 輪積 痕有り, 赤彩	覆土 下層	胴部5%, 図版14
24	円筒埴輪	—	(3.6)	—	—	(24.3)	長石・石英	5YR6/6 橙色	外面縦ハケ・横ナデ, 内面ヘラナデ, 透孔有り	覆土 下層	胴部5%, 図版14
25	円筒埴輪	—	(3.4)	—	—	(17.0)	長石・石英	5YR5/6 明赤褐色	外面縦ハケ・横ナデ, 内面ヘラナデ, 透孔有り	覆土 下層	胴部5%, 図版14
26	円筒埴輪	—	(4.7)	—	—	(58.4)	長石・石英	5YR6/6 橙色	外面縦ハケ・横ナデ, 内面ヘラナデ, 凸帯断面台形	覆土中	胴部5%, 図版15
27	円筒埴輪	—	(4.5)	—	—	(36.3)	長石・石英	5YR5/6 明赤褐色	外面横ナデ, 内面ヘラナデ, 凸帯 断面台形, 透孔有り	覆土中	胴部5%, 図版15
28	形象埴輪	—	(5.1)	—	[8.0]	(63.2)	長石・石英・ 白色粒子	5YR6/6 橙色	内外面ナデ	覆土中	脚部5%, 馬丸, 図版15
29	円筒埴輪	—	(2.9)	—	—	(19.2)	長石・石英	5YR5/6 明赤褐色	内面ナデ, 口唇部横位ヘラナデ	TM2 墳丘上採集	口縁部5%, 図版15
30	円筒埴輪	—	(1.9)	—	—	(7.5)	長石・石英	5YR5/6 明赤褐色	内面ヘラナデ, 口唇部横位ヘラナ デ	TM2 墳丘上採集	口縁部5%, 図版15
31	円筒埴輪	—	(2.5)	—	—	(24.9)	長石・石英	5YR6/6 橙色	外面縦ハケ, 内面ヘラナデ	TM2 墳丘上採集	胴部5%, 図版15
32	円筒埴輪	—	(5.1)	—	—	(58.4)	長石・石英	5YR5/6 明赤褐色	内面ヘラナデ, 凸帯断面台形, 透 孔有り	TM2 墳丘上採集	胴部5%, 図版15

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考 (残存率・形式・焼成窯・図版等)
33	須恵器	蓋	—	(1.4)	—	(16.4)	長石・石英・ 小礫・海綿 骨針	2.5YR6/1 黄灰色	普通	ロクロ水挽き成形, 内外面 ロクロナデ 内面窯印	TM2 墳丘上採集	体部5%, 木葉下窯跡群 産, 図版11
34	土師器	甕	—	(1.6)	—	(10.3)	長石・石英	7.5YR6/6 橙色	普通	内外面横ナデ	TM2 墳丘上採集	口縁5%, 図版11

第3号墳（第11・12図，第6表，PL1・6～8・11・12・15）

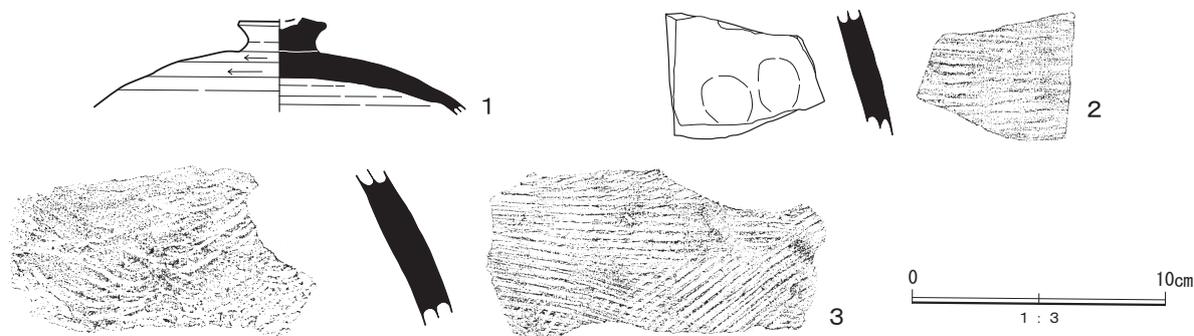
位置 調査区北部のA1a8～A2f4区，標高43.0～44.0mの台地斜面部に位置している。

確認状況 墳丘の西側調査区のA1d6～A1i9区，舗装された住宅地への進入路の約80～120cm下から周溝が確認された。全周しているとする約1/5程度の確認である。
規模と形状 現況では，周溝内縁で推定径約32m，高さ約5mの円墳と考えられる。
当古墳群中では最大規模で，頂部平坦面は狭く，墳丘の立ち上がりが比較的急である。

周溝 墳丘の西側部分のみ確認。全周しているかどうかは不明である。調査区の位置関係から、上幅、下幅ともに不明であるが、95cm幅のトレンチで25mほど確認した。深さは34～100cmである。斜面を利用して造られており、壁は外傾して緩やかに立ち上がり、断面形は皿状である。覆土は15層に分けられ、ロームブロックを含み、ブロック状の堆積を示す人為堆積である。

遺物出土状況 周溝の覆土中から土師器2点（甕）、須恵器4点（坏・甕・大甕）、礫4点が、墳丘上から土師器2点（坏・甕）が出土している。その他にも、混入あるいは流入した弥生土器6点が出土している。埴輪の出土是一片もない。周溝から出土した土器は、周溝の底面から約10～20cmの高さ（ほぼ同じ層）で一様に出土している。特に、出土した須恵器は、ほとんどが木葉下窯跡群産の8世紀第2四半期前葉の製品と考えられる。周溝が埋められる過程で投棄されたものかは不明であるが、土器が示す時期に何らかの祭祀行為が行われていた可能性が示唆される。

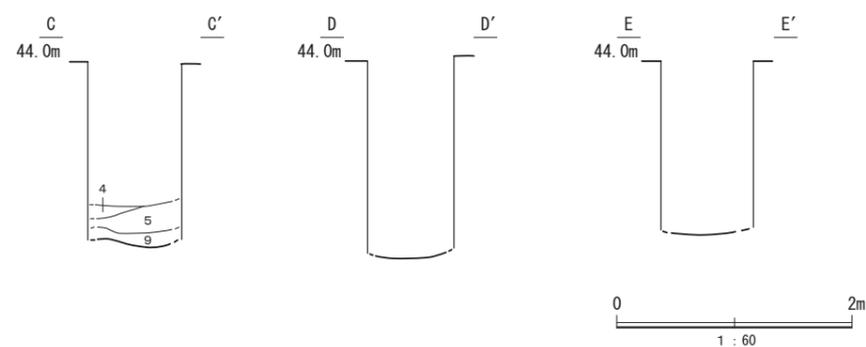
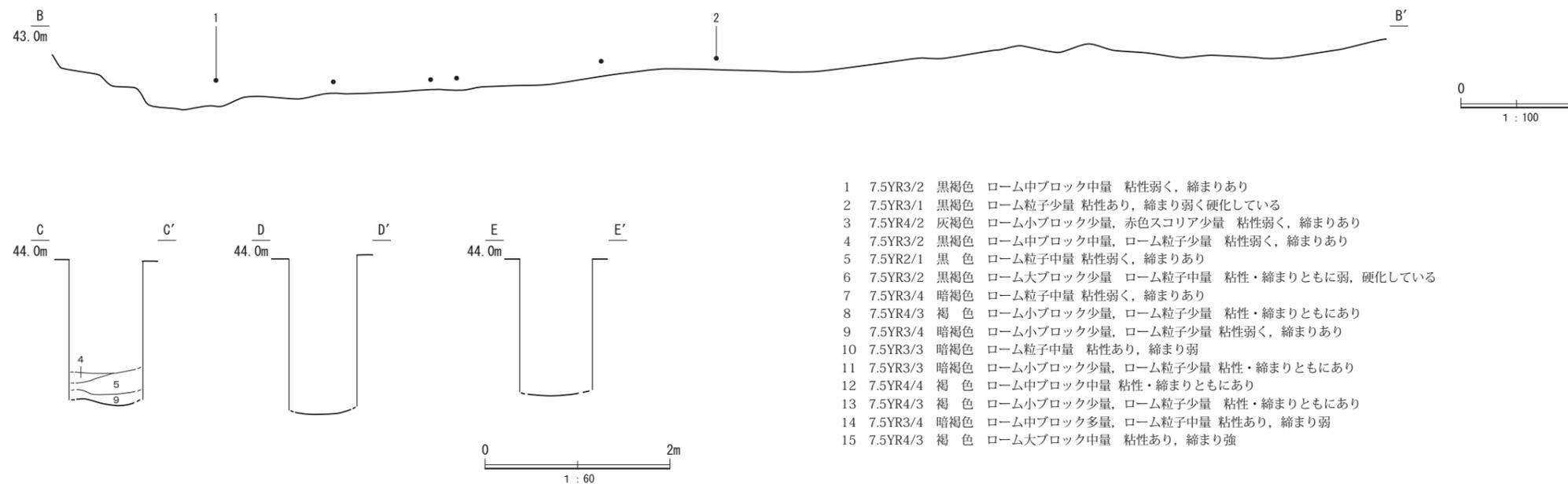
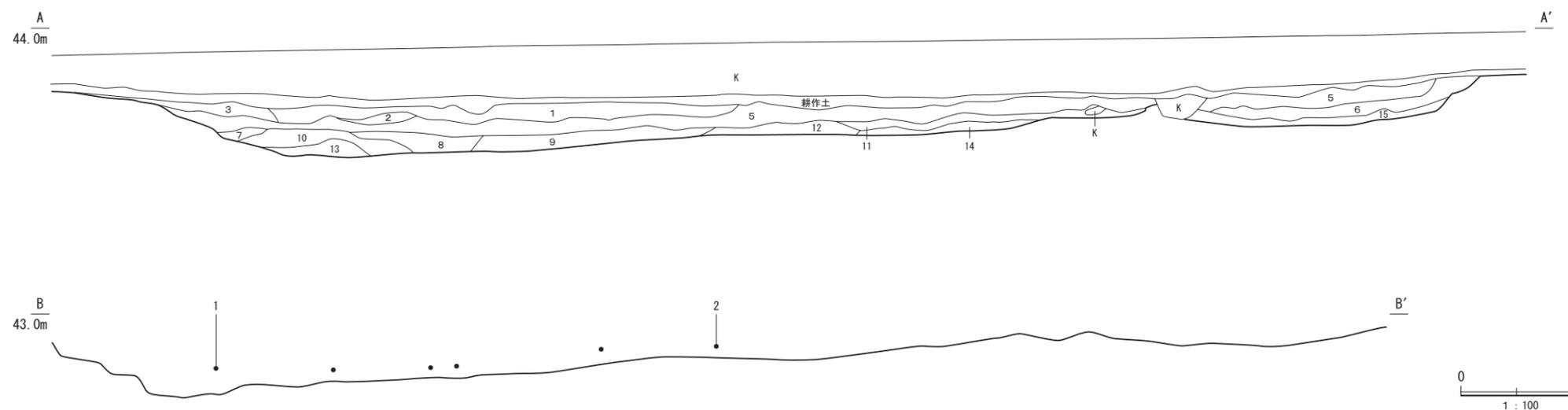
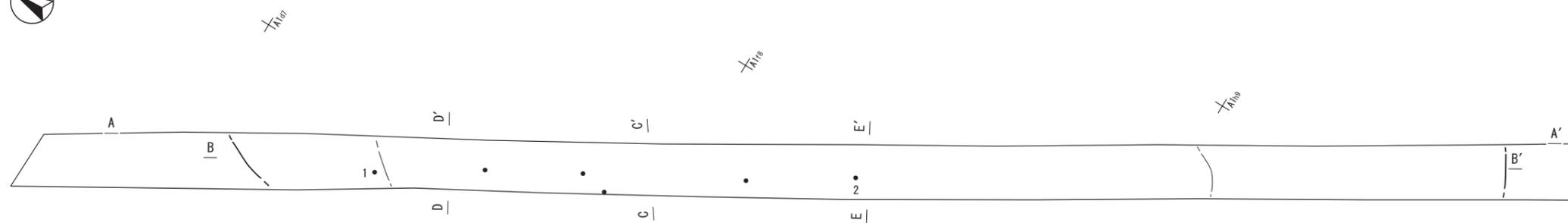
所見 当古墳は、表土の全面が流出し、盛土が露出した状態である。墳頂は狭い平場で、周溝はもとより、墳丘からの埴輪の採取もない。礫（花崗岩）が墳頂に落ちているだけでなく、周溝からも出土している。周溝は、斜面を利用して造られているため、地山を確認するのに困難を極めた。調査した長さから幅は不明であるが、墳丘の規模に比例し、大形のものとして推定される。また、埴輪を伴っていないが、周溝から須恵器（大甕）が出土していることから、埴輪供給停止後に追葬が行われた可能性もある。形態と出土遺物から7世紀中葉に築造され、8世紀前半に埋没したと考えられる。



第11図 第3号墳出土遺物実測図

第6表 第3号墳出土遺物観察表（第11図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考 (残存率・形式・焼成窯・図版等)
1	須恵器	蓋	—	(3.7)	—	(175.5)	長石・石英・ 海綿骨針	2.5YR6/1 黄灰色	普通	ロクロ水挽き成形、内外面 ロクロナデ、外面自然釉	覆土 中層	摘み部～体部60%、木 葉下窯跡群産、図版12
2	須恵器	甕	—	(4.9)	—	(38.3)	長石・石英・ 海綿骨針	2.5YR5/1 黄灰色	普通	体部外面横位の平行叩き、 内面当て具痕	覆土 中層	体部5%、木葉下窯跡群 産、図版11
3	須恵器	甕	—	(6.2)	—	(177.0)	長石・石英・ 小礫・海綿 骨針	5YR6/1 灰色	普通	体部外面縦位・横位に平行 叩き、内面当て具痕	覆土中	体部5%、木葉下窯跡群 産、図版12



- | | | | | |
|----|----------|-----|---------------------|-------------------|
| 1 | 7.5YR3/2 | 黒褐色 | ローム中ブロック中量 | 粘性弱く、縮まりあり |
| 2 | 7.5YR3/1 | 黒褐色 | ローム粒子少量 | 粘性あり、縮まり弱く硬化している |
| 3 | 7.5YR4/2 | 灰褐色 | ローム小ブロック少量、赤色スコリア少量 | 粘性弱く、縮まりあり |
| 4 | 7.5YR3/2 | 黒褐色 | ローム中ブロック中量、ローム粒子少量 | 粘性弱く、縮まりあり |
| 5 | 7.5YR2/1 | 黒色 | ローム粒子中量 | 粘性弱く、縮まりあり |
| 6 | 7.5YR3/2 | 黒褐色 | ローム大ブロック少量、ローム粒子中量 | 粘性・縮まりともに弱、硬化している |
| 7 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム粒子中量 | 粘性弱く、縮まりあり |
| 8 | 7.5YR4/3 | 褐色 | ローム小ブロック少量、ローム粒子少量 | 粘性・縮まりともにあり |
| 9 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム小ブロック少量、ローム粒子少量 | 粘性弱く、縮まりあり |
| 10 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | ローム粒子中量 | 粘性あり、縮まり弱 |
| 11 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | ローム小ブロック少量、ローム粒子少量 | 粘性・縮まりともにあり |
| 12 | 7.5YR4/4 | 褐色 | ローム中ブロック中量 | 粘性・縮まりともにあり |
| 13 | 7.5YR4/3 | 褐色 | ローム小ブロック少量、ローム粒子少量 | 粘性・縮まりともにあり |
| 14 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | ローム中ブロック多量、ローム粒子中量 | 粘性あり、縮まり弱 |
| 15 | 7.5YR4/3 | 褐色 | ローム大ブロック中量 | 粘性あり、縮まり強 |

第 12 図 第 3 号墳遺構図

(4) 中世以降

本調査では、中世以降と考えられる長方形型の土坑3基、時期不明の土坑2基が検出された。(第5号土坑は欠番)長方形型の土坑3基はほぼ主軸方向が同じで規格に統一性がみられる。また、この時期に伴う遺物は出土しなかった。以下、遺構について記述する。

第1号土坑(第13図)

位置 調査区南部のC2j1区で、標高44.0mの台地平坦部に位置している。

確認状況 調査区南部に集中して構築され、舗装された住宅地への進入路の下に確認された。第2号土坑を掘り込み、第3・6号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸(2.86)m、短軸(0.32)mの長方形で、長軸方向はN-10°-Eである。深さは(32)cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分けられる。ロームブロックや粒子を含み、不規則な堆積状況から人為堆積である。

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、形態と埋没状況、重複関係から中世以降の芋穴と考えられる。

第2号土坑(第13図)

位置 調査区南部のC2i1区で、標高44.0mの台地平坦部に位置している。

確認状況 調査区南部に集中して構築され、舗装された住宅地への進入路の下に確認された。第1・3号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸(2.14)m、短軸(0.52)mの長方形で、長軸方向はN-25°-Eである。深さは(26)cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 1層に分けられる。ロームブロックを含み、不規則な堆積状況から人為堆積である。

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、形態と埋没状況、重複関係から中世以降の芋穴と考えられる。

第3号土坑(第13図)

位置 調査区南部のC2i1区で、標高44.0mの台地平坦部に位置している。

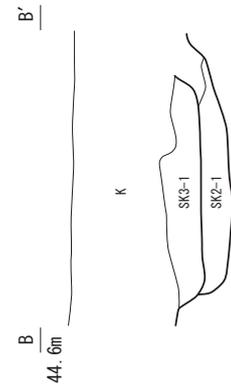
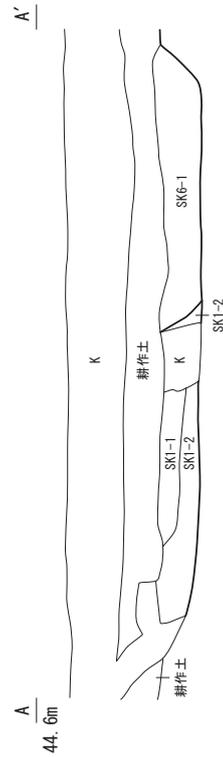
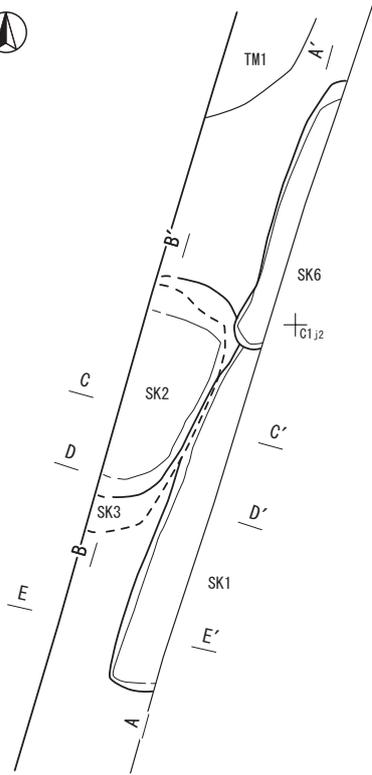
確認状況 調査区南部に集中して構築され、舗装された住宅地への進入路の下に確認された。第1・2号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸(1.85)m、短軸(0.68)mの長方形で、長軸方向はN-25°-Eと推定される。深さは(32)cm、底面は平坦で、壁は緩斜して立ち上がっている。

覆土 1層に分けられる。ロームブロックを含み、不規則な堆積状況から人為堆積である。

遺物出土状況 須恵器片1点(坏)が出土しているが、時期が伴わない。

所見 時期は、埋没状況と重複関係から中世以降と考えられるが、特定の時期は不明である。



第1号土坑

- 1 7.5YR3/2 黒褐色 ローム粒子少量 粘性強く、縮まりあり
- 2 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量 粘性強く、縮まりあり

第2号土坑

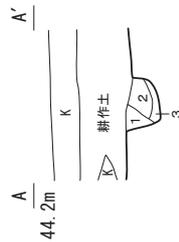
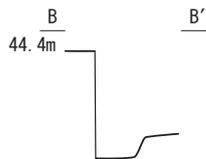
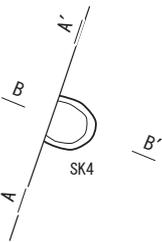
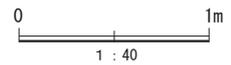
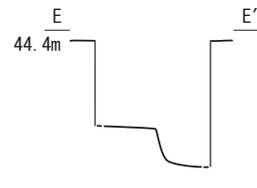
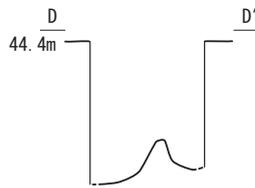
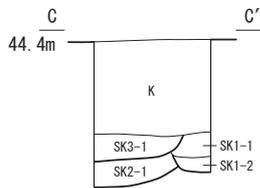
- 1 7.5YR4/4 褐色 ローム小ブロック中量 粘性あり、縮まり強

第3号土坑

- 1 7.5YR3/2 黒褐色 ローム粒子中量 粘性強く、縮まりあり

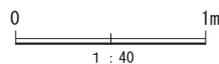
第6号土坑

- 1 7.5YR3/4 暗褐色 ローム大ブロック少量、ローム粒子中量 粘性あり、縮まり強



第4号土坑

- 1 7.5YR3/3 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子中量 粘性あり、縮まり強
- 2 7.5YR3/4 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量 粘性・縮まりあり
- 3 7.5YR4/2 灰褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子中量 粘性強く、縮まりあり



第13図 土坑実測図

第4号土坑（第13図）

位置 調査区南部のD2a1区で、標高44.0mの台地平坦部に位置している。

確認状況 調査区南部に構築され、舗装された住宅地への進入路の下に確認された。

規模と形状 長径（0.40）m、短径（0.38）mの円形である。深さは（28）cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分けられる。ロームブロックや粒子を含み、不規則な堆積状況から人為堆積である。

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、埋没状況から特定の時期は不明である。

第6号土坑（第13図）

位置 調査区南部のC2i1区で、標高44.0mの台地平坦部に位置している。

確認状況 調査区南部に集中して構築され、舗装された住宅地への進入路の下に確認された。第1号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸（2.30）m、短軸（0.24）mの長方形で、長軸方向はN-10°-Eである。深さは（35）cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 1層に分けられる。ロームブロックや粒子を含み、不規則な堆積状況から人為堆積である。

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、形態と埋没状況、重複関係から中世以降の芋穴と考えられる。

第4章 まとめ

稲荷塚古墳群は、3基の円墳で構成された古墳群を中心とする、縄文時代から中世までの複合遺跡である。今回の調査では、古墳の周溝と土坑を確認した。

古墳については、それぞれの古墳の大きさは異なるが、3基の古墳にはそれぞれに名称が付けられ、古来から墳丘の頂上に小さな祠が祭られて、地権者によって大切にされてきた。今回の調査では、これまであまり分からなかった周溝の形態や遺物の情報を蓄積する良い機会となったばかりでなく、桜川流域の古墳時代の文化圏の広さや繋がり様子を改めて再認識することができた。

ここでは、発掘調査は行われていないものの、残存している古墳の墳丘部分を踏査した結果も踏まえ、稲荷塚古墳群の様相についてまとめとしたい。

第1節 古墳の様相（築造年代順）

（1）第2号墳

推定径約18m、高さ約2.5mの円墳。墳頂平坦部が比較的広く、墳頂に小祠を祭り、南側に参道がある。埴輪は墳頂と中段の2段に樹立され、埴輪群中に形象埴輪を配していたと考えられる。埋葬施設については推測の域を出ない。墳頂の特徴から判断すると、木棺直葬などの竪穴系埋葬施設が妥当のように思われるが、墳頂に露出する花崗岩の平石を天井石とみなせば初現的な横穴式石室もしくは箱形石棺の可能性も捨てきれない。いずれにせよ県央部における竪穴系埋葬施設から横穴式石室へ移行する過渡期の様相をもつ古墳と評価でき、今後の調査に期待する。築造時期は6世紀中葉から後半と考えられる。

（2）第1号墳

推定径約25m、高さ約3.5mの円墳で、2号墳より規模を拡大する。残存する3基中では遺存状態が最も悪く、全体的に改変されている。狭い墳頂平坦部は中央が窪み、小祠が祭られ、南向きの参道がとりついている。埋葬施設は判然としないが、横穴式石室に利用された可能性がある花崗岩の割石が墳頂周辺や斜面部に散在する。墳頂付近が大きく窪むことや花崗岩の割石の存在を考慮すると当墳の主体部は南面する横穴式石室の蓋然性が高く、石材確保を目的とした乱掘によって主体部が破壊されたと考えられる。埴輪をもたないこと、平野を望む好立地であることから、1号墳に後出し、3号墳に先行する位置付けが妥当と判断される。7世紀初頭頃に築造されたと想定しておきたい。

（3）第3号墳

推定径約32m、高さ約5mの円墳で、群中で最大の古墳であるが、北に傾斜する緩斜面に築造されており、立地条件は良いとはいえない。墳頂平坦部は狭く、墳頂に小祠を祭る。南から祠に向かう参道があり、大きく窪む様子から長期間の利用を伺わせる。埋葬施設は不明だが、南側中段の参道脇に大型の花崗岩の割石が存在すること、同種の

花崗岩が墳頂部祠脇に落ちていることや周溝中から出土していることから、横穴式石室の可能性が極めて高い。埴輪の出土はなく、周溝から須恵器（蓋、大甕）が出土している。県内では、埴輪終焉後に大甕を墳丘に配置する事例が複数確認されていることから、当墳も埴輪終焉後に築造された可能性が極めて高い。確証には乏しいが7世紀前葉から中葉頃に築造されたと考えられる。

第2節 周辺地域との繋がり

ここでは、周辺遺跡との繋がりについて出土遺物からうかがい知れることを述べることにする。

(1) 埴輪（第2号墳出土）について

出土した埴輪は、円筒埴輪83片・朝顔形埴輪4片、形象埴輪1片（TM2-28、動物の脚か。）である。ほとんどが残存率が低く、接合できたのはTM2-12とTM2-13の2片のみであった。中には一部に赤彩が残っているTM2-23の1片が確認できたが、形状は不明である。

円筒埴輪は、2条凸帯3段構成の可能性が高く、底径約15cm、高さ不明で、透孔の径は10cm弱程と推定される。外面調整は、条線が不明瞭なヘラに近いハケ状のものである。凸帯は断面が台形でシャープだが、突出は小さく、透孔は切りっぱなしである。埴輪のみでの時期判断は難しいが、6世紀中葉以降と考えられる。

胎土に複数のバリエーションが認められ、複数の工人の関与が推測される。胎土は比較的精良で、窖窯焼成である。桜川流域の古墳群から出土した既知の埴輪との類似点が多く、小幡北山系窯を第一候補とするが、今だ発見されていない未知の窯で焼成された可能性も否定できない。^{註1)}

(2) 須恵器（第1・3号墳出土）について

周辺遺跡に、山田窯跡群と木葉下窯跡群の2つの生産遺跡が確認されているが、出土・採取された須恵器はほぼ木葉下窯跡産の須恵器と考えられる。出土状況から、第1・3号墳共に周溝の覆土中の特定の層からの出土に限られているので、一定の時期に投棄されたものである。時期は、第1号墳築造が7世紀初頭頃に対して出土須恵器は8世紀第2四半期後葉まで、第3号墳築造が7世紀前葉から中葉に対して出土須恵器は8世紀第2四半期前葉である。共に周溝が築造から埋没までの過程には約100年の時間があり、古墳築造後も長期間に渡って須恵器が供献されていたものと考えられる。

また、多量の須恵器は出土していないが、第3号墳では大甕の体部片が出土している。ちなみに、桜川市（旧岩瀬町）の山ノ入古墳では、6世紀後葉に築造された第2号墳から計14体の須恵器大甕（7世紀前葉）が出土している。埴輪終焉後に、墳丘上やくびれ部の周溝と墳丘の間に設けられた平坦面に須恵器を並べて祭祀行為を行っていた例とされ、当墳もその可能性をもつ事例になるかもしれない。

(3) 石室・石棺の石材について

古墳時代中期から後期にかけて、桜川流域では標高約 50～80 m の高い丘陵地に多くの円墳や巨大な前方後円墳が築造される。古墳時代後期後葉頃になると、周辺の三本松古墳群・田島古墳群・牛伏古墳群などでは花崗岩を使用した横穴式石室が盛行する。これらの石材は、現在確認されている水戸市谷津町の花崗岩の露頭地から供給されたとみて間違いない。この付近は、海拔 81 m ほどで、木葉下窯跡群の桜川支流を挟んだ向かいの台地上であり、高度成長期には採石・採砂場とされていた経緯がある。三本松古墳群・田島古墳群・牛伏古墳群・加倉井古墳群など、当時の古墳築造地への石材需要を担っていたと考えられる。

(4) 古墳の変遷について

前述した埴輪、須恵器、石材から、当古墳群は桜川支流の古墳群と地域的・文化的に強い繋がりを有していたと考えられる。そこで、それぞれの古墳と他の古墳群との共通点を統合的にみてみたい。

第 2 号墳は、小型ながら埴輪をもつ。埋葬施設は不明だが、竪穴系の木棺直葬か箱形石棺もしくは横穴式石室と考えられ、竪穴系埋葬施設から横穴式石室への過渡期の様相をもつ古墳とみられる。杉崎地区「コロニーあすなろ」に立地していたコロニー古墳群は、全長 30～33 m の前方後円墳 4 基、直径 10～20 m の円墳 11 基で構成され、いずれも小型で、その多くが埴輪を伴っている。調査が行われた 6 基の埋葬施設は竪穴系の木棺直葬で、古いタイプの棺構造を伝統的に使用する地域性が指摘されている。

第 1 号墳と第 3 号墳は埴輪を伴っておらず、墳丘や周溝から花崗岩の割石が確認されている。埋葬施設は横穴式石室であり、周溝から須恵器が出土していることを考えると、埴輪終焉後に築造された可能性が高い。墳丘規模は次第に大型化し、3 号墳段階には支丘単位で最大規模の円墳を築造した。集落の有力者に相応しい規模である。ただし、前方後円墳の終焉後に限れば 32 m の規模は最大クラスである。

周辺の古墳群では、それぞれの支流で中期から後期にかけて標高約 50～80 m の高い丘陵地に多くの円墳や巨大な前方後円墳を築造する傾向があるが、「それぞれの群には前方後円墳を伴う有力なグループと、小型の円墳のみで構成されるさほど有力でないグループが存在する。」と指摘されている。^{註 2)}

当遺跡は標高約 43～45 m の台地上に立地しており、円墳のみで構成され、付近に前方後円墳の存在は確認されていない。一方、西側に位置する水戸市（旧内原町）の田島から杉崎地区付近の丘陵性台地上では、数百基の古墳が確認されており、多くの古墳群中に複数の前方後円墳が築造されている。これらは地域的なまとまりをもつ古墳群と考えられ、広義の「内原古墳群」を形成する。その中核をなすのは牛伏支丘を墓域とした牛伏古墳群（前方後円墳 7 基）・舟塚古墳（80 m）・二所神社古墳（85 m）を営んだ集団で、この集団の影響下に地域の古墳秩序が形成されていたと考えられる。稲荷塚古墳群を営んだ集団も中核集団の影響下に置かれていたと推測されるが、後期後半頃には小型円墳ながら埴輪を樹立する階層へと成長した。その規模と埴輪配置の特徴から勘案すると、杉崎地区所在のコロニー 88 号墳と同じ階層・地位であったと評価できる。埴輪終焉後に築造された 3 号墳は径約 32 m の規模を有する。内原古墳群中における当該

期の大型の最大規模が 28 ～ 35 m である点に注目すると、稲荷塚古墳 3 号墳の被葬者は内原古墳群における小集団の有力者と同等の階層・地位であったと考えられる。

当地域は古墳時代以前から、桜川流域の文化圏の中に組み込まれ、強い影響を受けてきた。特に、桜川流域の流通による経済的基盤を基に、周辺遺跡との政治・文化の繋がりがあったことが予想されるが、当古墳群は桜川流域の低台地から丘陵地への古墳の変遷過程とは別の変遷過程が見て取れる事例ということができよう。

註

- 1) 井博幸氏のご教示による。
- 2) 井博幸氏は、内原町北部丘陵の古墳群は、明確な墓域意識のもとに築造されており、丘陵の支丘単位で 2 つのグループによる 1 つの群が構成されていると指摘している（井ほか 1999）。

引用・参考文献

- 井 博幸ほか 1980 『茨城県内原町 杉崎コロニー古墳群』日本窯業史研究所
 井 博幸ほか 1999 『牛伏 4 号墳の調査』内原町教育委員会
 小澤 重雄 2006 『山ノ入古墳群 大日下遺跡北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』東日本道路株式会社・茨城県教育財団
 根本 康弘 2016 『愛宕山古墳群 旧水戸生涯学習センター解体撤去事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育委員会・茨城県教育財団

第 7 表 出土遺物集計表

時代区分		古墳時代										中世以降					
遺構名		TM1 (周溝)		TM1 墳丘上で採集		TM2 (周溝)		TM2 墳丘上で採集		TM3 (周溝)		TM3 墳丘上で採集		SK3		総計	
		破片数	重量 (g)	破片数	重量 (g)	破片数	重量 (g)	破片数	重量 (g)	破片数	重量 (g)	破片数	重量 (g)	破片数	重量 (g)	破片数	重量 (g)
縄文土器	深鉢	3	15.4			1	15.6									4	31.0
弥生土器	広口壺									3	15.9	3	20.1			6	36.0
土師器	坏	10	27.9									1	1.7			11	29.6
	高台付坏	1	29.3													1	29.3
	甕	18	179.2	3	7.3			17	72.3	2	29.6	1	2.9			41	291.3
須恵器	坏	5	16.3											1	3	6	19.3
	高台付坏	1	18.7													1	18.7
	蓋	1	2.3					1	16.4	1	175.4					3	194.1
	盤	1	3.2													1	3.2
	甕	3	65.6							3	229.6					6	295.2
土製品	埴輪					44	1179.1	44	398.2							88	1577.3
石製品 礫	剥片	1	5.5													1	5.5
	礫									4	752.5					4	752.5
	総計	44	363.4	3	7.3	45	1194.7	62	486.9	13	1203.0	5	24.7	1	3.0	173	3283.0

写 真 图 版

図版 1



稲荷塚古墳群
第 1 号 墳
(南側上空から)



稲荷塚古墳群
第 2 号 墳
(南側上空から)



稲荷塚古墳群
第 3 号 墳
(東側上空から)

図版 2



第1号墳全景（南から）



第1号墳周溝完掘状況（北から）



第1号墳周溝土層断面A（南から）



第1号墳周溝土層断面B（南から）



第1号墳周溝土層断面C（南から）



第1号墳周溝遺物出土状況（東から）



第1号墳周溝遺物出土状況（南から）



第1号墳周溝完掘状況（南から）



第1号墳周溝遺物出土状況（南から）

図版 4



第2号墳全景（南から）



第2号墳周溝完掘状況（北から）



第2号墳周溝遺物出土状況（南から）



第2号墳周溝遺物出土状況（南から）



第2号墳周溝遺物出土状況（北から）



第2号墳周溝遺物出土状況（南から）



第2号墳周溝遺物出土状況（北から）



第2号墳周溝遺物出土状況（南から）

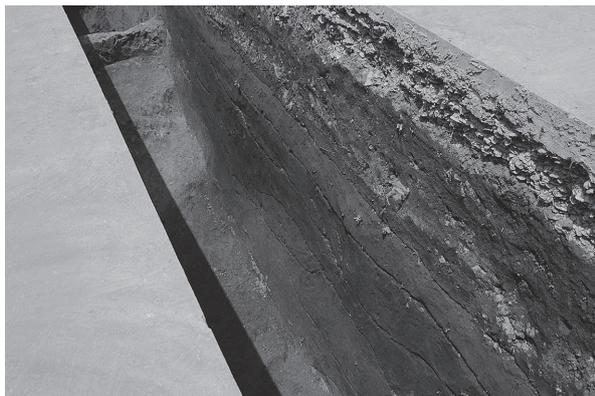
図版 6



第3号墳全景（南から）



第3号墳周溝完掘状況（東から）



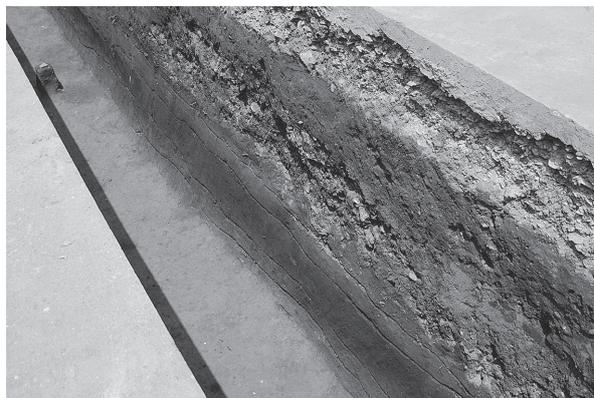
第3号墳周溝土層断面 A - 1 (西から)



第3号墳周溝土層断面 A - 2 (西から)



第3号墳周溝土層断面 A - 3 (西から)



第3号墳周溝土層断面 A - 4 (西から)



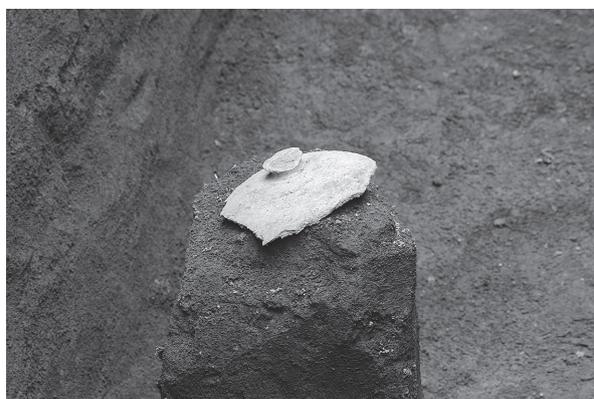
第3号墳周溝土層断面 A - 5 (西から)



第3号墳周溝土層断面 A - 6 (西から)



第3号墳周溝土層断面 B (南から)



第3号墳周溝遺物出土状況 (南から)

図版 8



第3号墳周溝遺物出土状況（南から）



第3号墳周溝遺物出土状況（南から）



第3号墳周溝遺物出土状況（南から）



第3号墳周溝完掘状況（北から）



第3号墳周溝完掘状況（南から）



基本層序 (テストピット1) (西から)



基本層序 (テストピット2) (西から)



第1・2・6号土坑完掘状況 (南西から)



第1・2・3号土坑土層断面 (南から)



第1号土坑土層断面 (南西から)



第6号土坑土層断面 (南西から)



第4号土坑完掘状況 (南から)

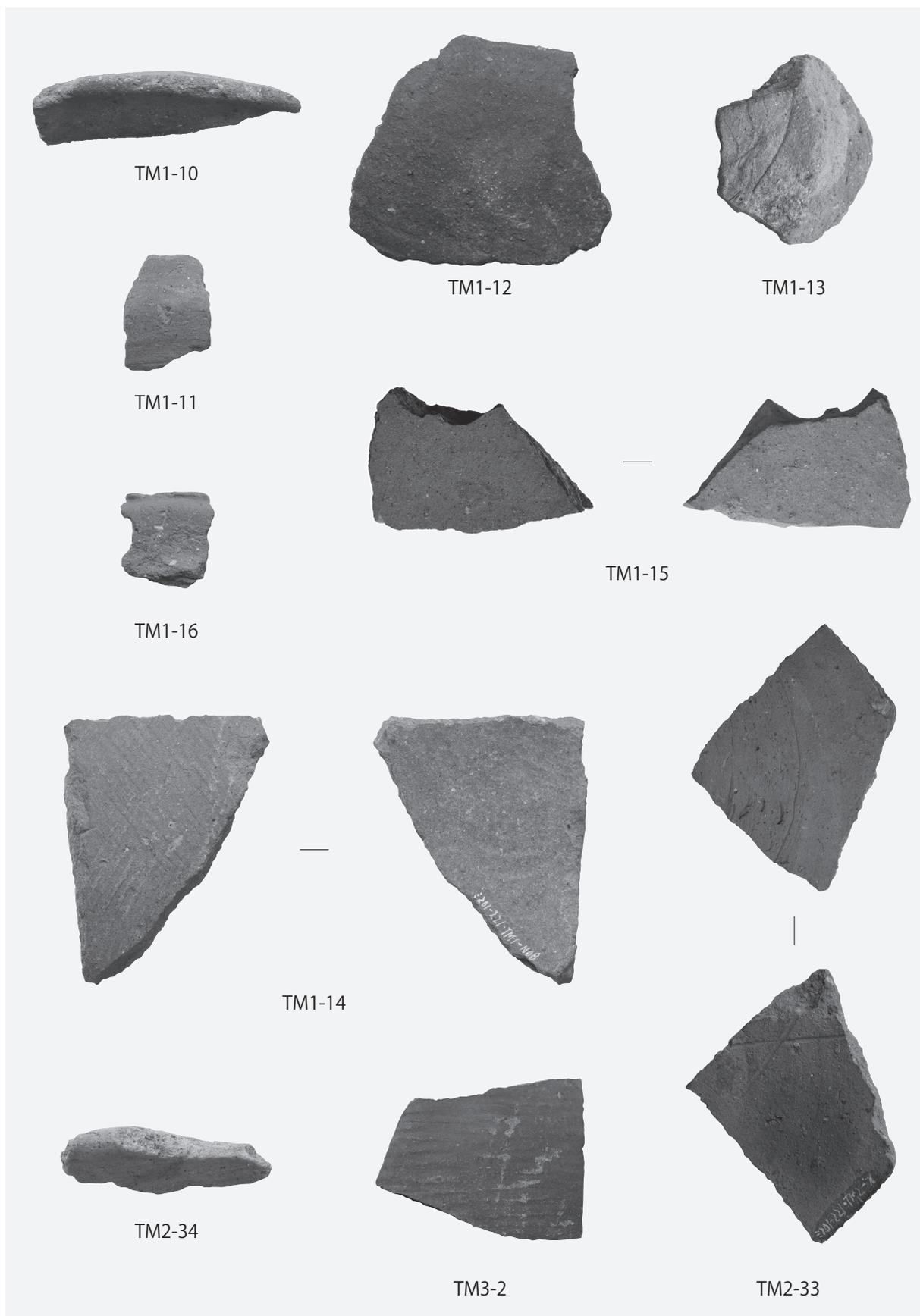


第4号土坑土層断面 (北東から)

図版 10

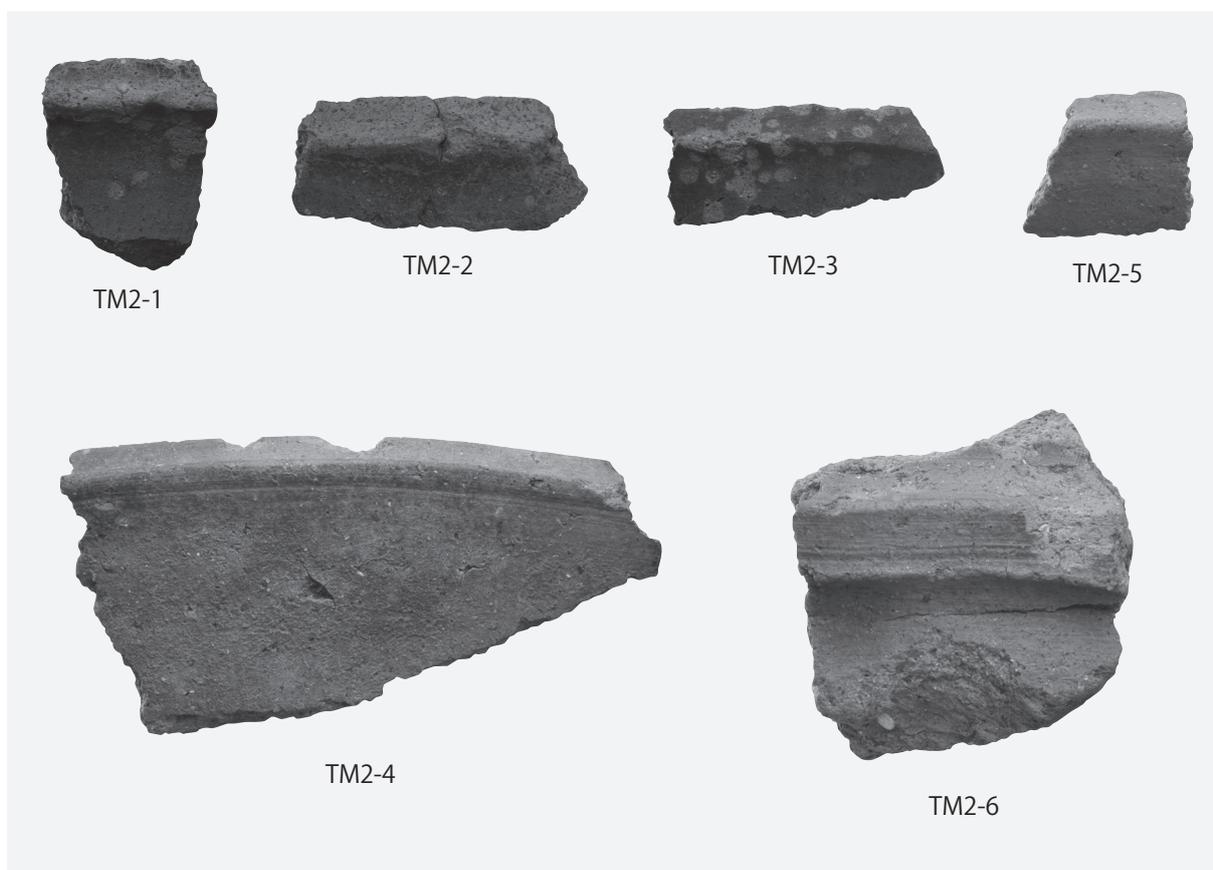
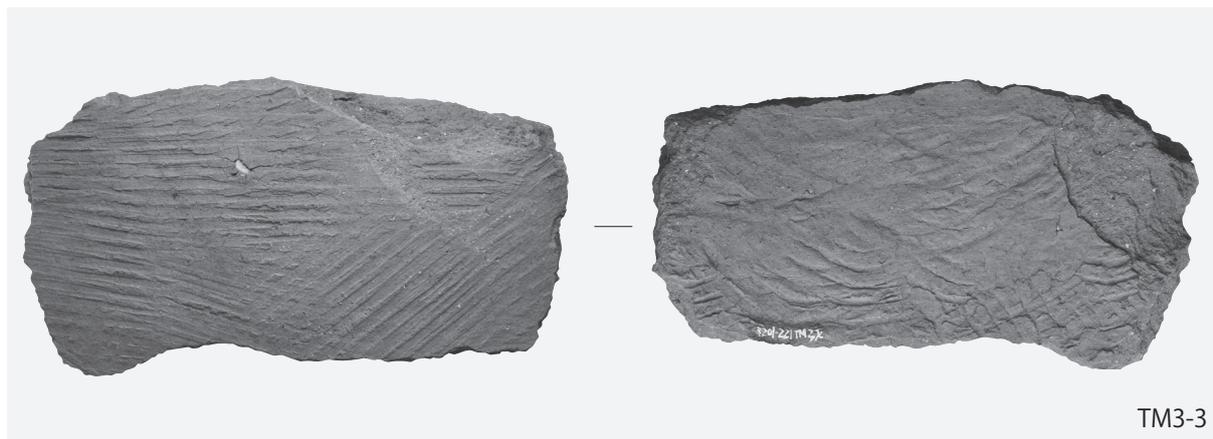


縄文・弥生時代，第 1 号墳出土遺物

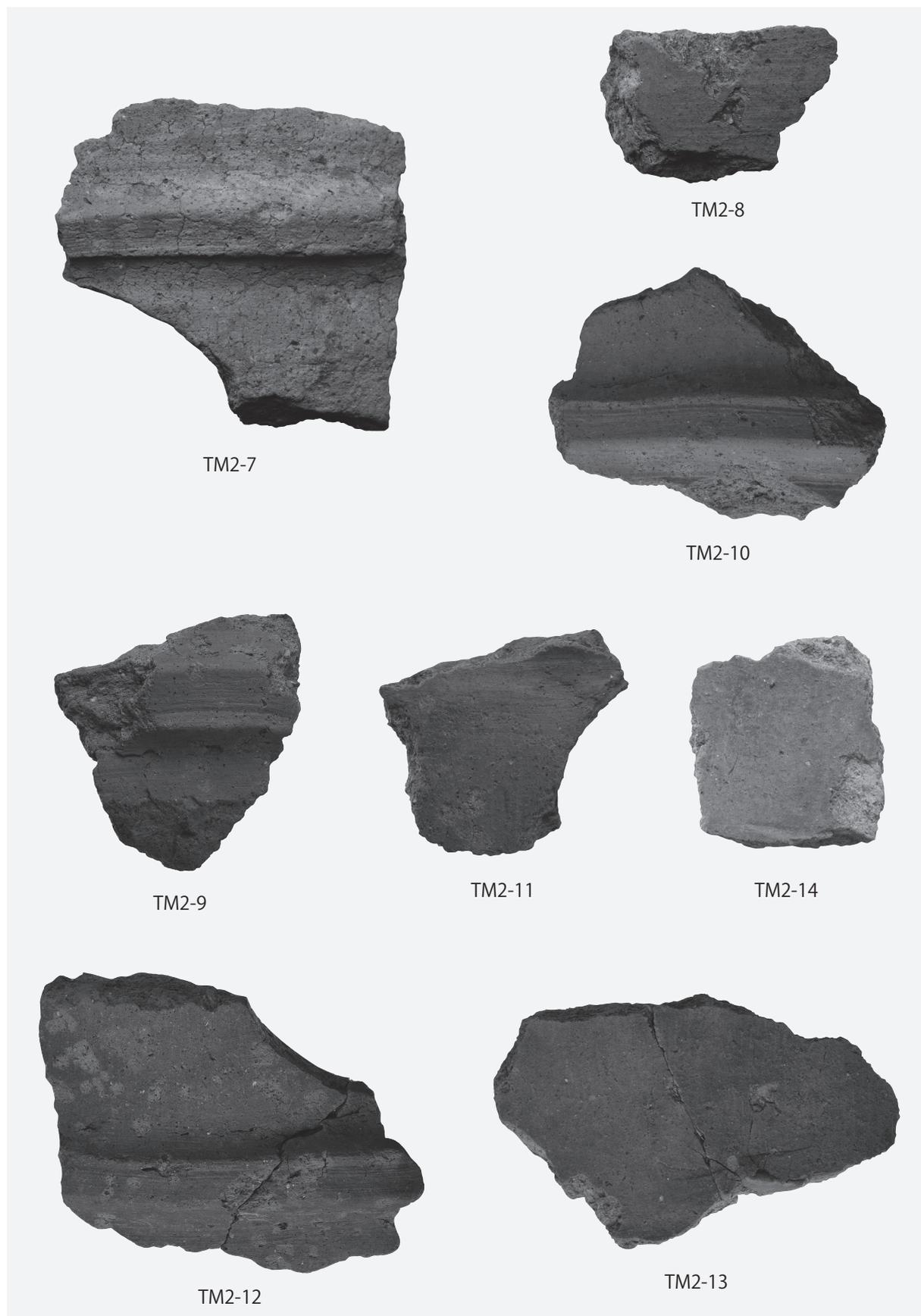


第1～3号墳出土遺物①

図版 12

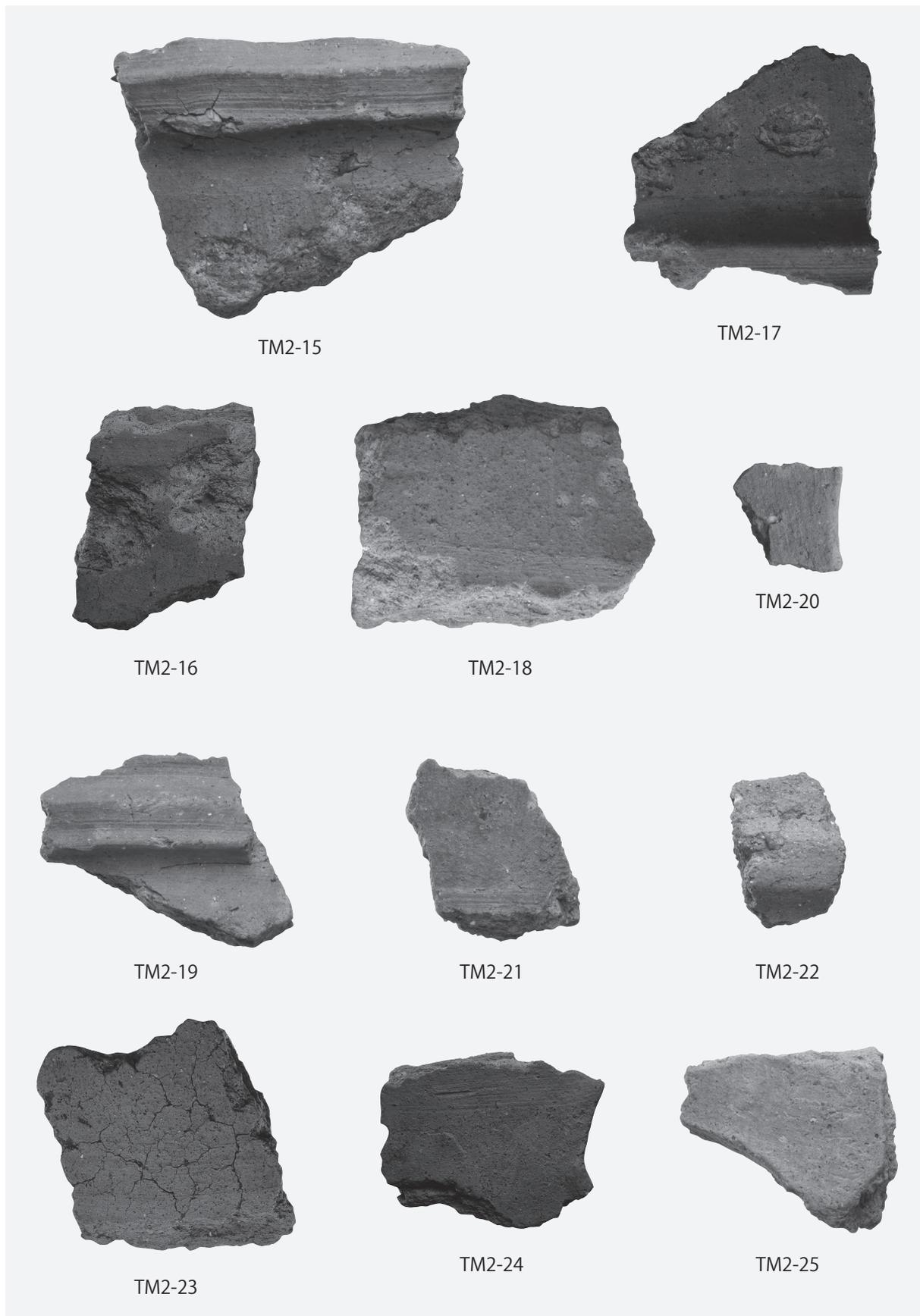


第1～3号墳出土遺物②



第 2 号墳出土遺物①

图版 14



第 2 号墳出土遺物②



TM2-26



TM2-27



TM2-28



TM2-29



TM2-30



TM2-31



TM2-32



TM3 周溝から出土した礫

報告書抄録

ふりがな	いなりつかこふんぐん(だいいちちてんだいよんじ)							
書名	稲荷塚古墳群(第1地点第4次)							
ふりがな	こうきょうげすいどうこうじ(さくらがわしよりぶんくしせん4-1こうく)にともなうまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ							
副書名	公共下水道工事(桜川処理分区枝線4-1工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第116集							
発行機関	水戸市教育委員会 〒310-8610 水戸市中央1丁目4番1号							
著者名	成島 一也, 西川 忠春, 新垣 清貴							
編集者名	成島 一也, 西川 忠春							
編集機関	関東文化財振興会株式会社 〒308-0846 茨城県筑西市布川1012							
発行年月日	2019年12月25日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
イリツカコフン	イナリツカコフン			36° 23' 27"	140° 23' 26"	20190701 ~ 20190831	153.0㎡	公共下水道桜川処理分区枝線埋設工事
稲荷塚古墳群	茨城県水戸市大塚町1759~1753番地	08201	221					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
稲荷塚古墳群	古墳・包蔵地	縄文時代			縄文土器・剥片		円墳3基に伴う周溝が確認され、覆土中から土師器片、須恵器片、埴輪片が出土した。古墳の構築時期・埋設時期を考慮するうえで、貴重な資料となる。	
		弥生時代			弥生土器			
		古墳時代	古墳	3基	土師器・土製品・埴輪片			
		奈良時代			土師器・須恵器			
		中世以降	土坑	3基				
		不明		2基				

水戸市埋蔵文化財調査報告第 116 集

稲荷塚古墳群（第 1 地点第 4 次）

— 公共下水道工事（桜川処理分区枝線 4-1 工区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発行日 令和元年 12 月 25 日

発行 水戸市教育委員会
〒 310-8610 茨城県水戸市中央 1 丁目 4 番 1 号
TEL 029-224-1111

編集 関東文化財振興会株式会社
〒 308-0846 茨城県筑西市布川 1012
TEL 0296-28-7737

印刷 山三印刷株式会社
〒 311-4153 茨城県水戸市河和田町 4433-33
TEL 029-252-8481

『稲荷塚古墳群（第1地点第4次） 公共下水道工事（桜川処理分区枝線4-1工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』正誤表

ページ	訂正前	訂正後
ごあいさつ	南中坪遺跡	南仲坪遺跡
ごあいさつ	現状	原状
5	南中坪遺跡	南仲坪遺跡
報告書抄録	2019年12月25日	2019年12月19日